

<論 説>

英語通信文の歴史的考察(1)

—— 15世紀の英文レターの特徴 ——

稲 津 一 芳

目 次

はじめに

1. 英語の復活
2. 英語通信文の発生
3. 英語通信文の実例
4. 一般的特徴
5. むすび

はじめに

我々が通信文(レター)を書く時にはある一定の様式に従う。その様式は当該国の歴史、伝統、習慣、文化のもとに長い年月を経て完成されたものである。レターそのものの歴史は古く、昔から遠距離通信の手段として活用されていた。哲学者キケロ(Cicero (106-43 B. C.))は、レターについて次のように述べている⁽¹⁾。

letter-writing was invented just in order that we might inform those at a distance if there was anything important for them or for ourselves that they should know.

恐らく当初は、決められた様式はなく、伝えた

い最も重要なメッセージのみを自由に何らかの方法を用いて相手に伝えていたと思われる。しかし文字や筆記用具が発達するにつれ、通信文としての体裁が整い、それをレターに携わる人々がまね、徐々にレターの様式として一般化してきたものと思われる。

例えば、日本語のレターでは書き出しに、四季の移り変わりや相手方へのご機嫌伺いなど、一見不要と思われる文言が挿入され、その後にとやっと本論(用件)に入る。一方英文レターの場合は、上記の日本的な書き方は望ましくない悪例の最たるもので、特にビジネスレターではいきなり用件に入るのが良いとされている。

英文ビジネスレターの場合、我々日本人(非英語国民)は、英・米のモデルを模倣せざるを得ない。そのモデルも時代と共に変化していくのは当然である。下記のように、20世紀前半(1920年代)のレターは、今からわずか70年前にもかかわらずすでに旧式とされ、特に結びの言葉は、現代では全くナンセンスな表現とされている。

8, Bishopsgate, London, E. C. 2.

January 26, 1928.

The Right Honourable

The Chancellor of the Exchequer,
Treasury, Whitehall, S. W. 1.

Sir, - We have the honour to inform you that we have received from a correspondent, whose name we are not authorized to disclose, but from whose letter we are allowed to quote, the cash and securities to which reference is made below. Our correspondent writes:-

" Gifts to the nation of historic sites, buildings and works of art, are happily frequent; gifts to repay

debt comparatively rare, this last being a dull objective but bringing with its accomplishment certain comforts of its own. To repay the National Debt may be thought to be beyond the reach of individual effort, but as a beginning towards this end I am placing at your disposal, as trustees for the nation, some £ 500,000 as the nucleus of a fund to accumulate in your hands, and to be applied eventually to this object.

" I am entrusting this fund to your house in order to secure the benefit of your long experience in finance; and in the hope that others may from time to time be prompted to add to it or on similar lines to set up funds of their own, citizens and City uniting in an attempt to free their country from debt. "

We shall be glad to know that our acceptance of the trust meets with the approval of his Majesty's Government.

We have the honour to be, Sir,

Your obedient servants,

For Baring Brothers and Co. , Ltd. ,

Revelstoke, Director.

Treasury Chambers, Whitehall, S. W. ,

February 1, 1928.

Gentlemen, - In accepting on behalf of his Majesty's Government the trust for the benefit of the nation inaugurated by your anonymous correspondent and alluded to in Lord Revelstoke's letter of January 26, I desire to express again the Government's warm thanks, which I have already in more informal manner asked Lord Revelstoke to convey to the donor, for this magnificent gift. Among the motives which actuated the donor, as your letter shows, was the hope that others may be prompted from time to time to follow the example he has set on so spacious a scale. I hope to find occasion within the next few days of making a public announcement of his munificence.

I am, Gentlemen,

Your obedient servant,

Winston S. Churchill.

Messrs. Baring Brothers and Co. , Ltd.

(出所) 山崎宗直編『英米名著英語商業学及商業英語概論』(株)有朋堂 昭和12年, 209-210 ページ。

しかしながら当時は、上記のスタイルが、その社会(国)で認められた形式(format)であり、レター作成者は、それを無条件に踏襲せざるを得なかったことであろう。それでは、なぜこのような、今から見れば信じられないような表現が使われていたのであるか。

ここで、いみじくも「今から見れば……」と述べたように、当時の基準(standard)は、その時の社会・経済的な状況を理解した上で考えなければならない。現在の価値基準で判断すべきではないことは言うまでもない。

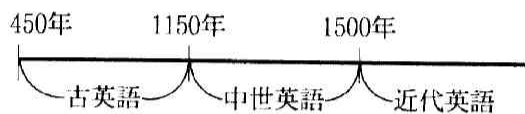
このように通信文といえどもその特徴は、当時の時代背景を反映したものであり、しかもある一定の共通性が見つけ出されるものと予想される。

そこで筆者は、通信文に関する歴史的な変遷過程を調べることにより、現在の通信文に至る本質と今後の動向が把握され则认为した。本稿ではその手始めとして、英語の通信文が普及し始めたと思われる15世紀に焦点を当ててみる。まず、言語としての「英語」がどのような経過を経て成立していったかを見てみる。そして次に、書き言葉としての英語の発展の中で、英文レターがどのよう

な影響を受けて、一定の形式を備えるようになっていったかを探る。最後に上記の歴史的背景のもとに、当時の具体的なレターを検討し、いわゆるビジネスレターの原形を見つけてみたい。

1. 英語の復活

英語の発展過程は、歴史的に「古英語 (Old English)」 「中世英語 (Middle English)」 「近代英語 (Modern English)」 に区分される。



本稿では、最も関係の深い中世英語の発展過程を見ていくことにする。それを前期中世英語時代 (1150-1300 年) と後期中世英語時代 (1300-1500 年) に分ける。

1-1. 前期中世英語時代 (1150-1300 年)

1) ノルマン人の征服 (The Norman Conquest)

——古英語の消滅

1066 年 1 月、24 年間の統治の後エドワード懺悔王 (Edward the Confessor) が跡継ぎのないまま亡くなると、英国は再び後継者選別に直面した。最終的には、ヘイスティングズ (Hastings) の戦いで、アングロサクソン人の最後の王ハロルド 2 世 (Harold II) を破ったノルマンディ公ウイリアム (William, the duke of Normandy) は、1066 年クリスマスの日に英国王位に就いた。これは、今まで英国に住んでいたアングロサクソン人にとって全く予期せぬ出来事であり、外国人 (ノルマン人) による英国征服を意味した。単なる英国の王位継承者の交代だけでなく、国家、社会全体の変化であった。従って一国民が他の国民に征服された場合に生じるすべての結果を伴った。最も重要な出来事は、新しい貴族 (a new nobility) の導入であった²⁾。英国の上流階級の多くは、戦死したか、あるいは裏切り者として処刑され、古英語時代の貴族 (the Old English nobility) は事実上壊滅した。この征服を契機として、英国社会の知識階級・文

化人集団の指導者である司教、修道院長など、また下位の貴族、騎士、聖職者、修道士などは、徐々にノルマン人か外国人によって占められるようになっていった。

これと同時に、言語に対する影響も非常に大きかった。新しく指導者となった人々が自分たちの言語を使用するのはあたり前のことである。彼らは、フランス語 (Norman French) を母国語にしており、彼らの侵入により当然、それまでの英国の言語 (古英語) は、表舞台から下りざるを得なくなった。彼らは、英語を全く知らなかったし、また覚える必要も努力もいなかった。事実これ以後約 200 年間、フランス語は、英国上流階級者間で使われる言葉であり続けた³⁾。また当初限られた人のみが使用したフランス語もやがて、現地の英国人が、ノルマン人と結婚したり、支配階級の人々と接する機会が増えるにつれて、徐々に英国人にも広まっていった。彼らもフランス語を覚えることが自らの利益になることに気付いたのである。

2) 社会的二重言語——フランス語とラテン語の隆盛

ノルマン系の人々が支配階級に多く登用されるにつれ、彼らの母国語であるフランス語の勢いはますます強まってきた。それまで種々の方言があり、統一的な国語とはいえずとも、一応 (古) 英語の使用がすべての階層で一般的であった。しかし指導者階級が追放されたり、交代させられたりしたために、英語の使用が徐々に制限されるようになっていった。それと同時に、英国を支配した王家や貴族の態度もフランス語使用の傾向を強めた。彼らは、どちらかといえばフランス志向が強く、フランスを本拠地にし、王家は、その在位期間中の英国滞在は極端に少なかった。彼らは、英国貴族というよりも英・仏兼領貴族で、英・仏両国に領土を持ち、フランス人と婚姻関係を結び、自分たち自身の利益または国王の利益を追求するために、フランスで多くの時間を過ごした。やがて上流階級がほとんどノルマン系の人々に占められるにつれ、フランス語が支配的となり、それま

での英語は、被支配者階級の言語となってしまった。

またラテン語は、英語の方言に見られるような表現の極端な差はなく、知識階級者間の共通言語 (lingua franca) としての便利性のために、依然として保守的な宗教家、学者たちが好んで使い、特に法律文書での使用は圧倒的であった。

このように英国を支配する上流階級ではフランス語が使用され、また社会の規範となる法律文書は従来通りラテン語が使用されていた。このためフランス語あるいはラテン語は、社会的地位の高いことを示す有力な手段となった⁽⁴⁾。これに対し英語は、下層階級の一般大衆の日常語として広まり、非支配者階級の言語、農奴の言語として蔑まれた。言語を中心に考えると、フランス語は上流部門で、英語は下流部門でという具合に、完全に二極分化された二言語社会が成立した。言い換えると、当時の英国は、民族の違いではなく社会階級差による二言語併用の (bilingual) 国であった⁽⁵⁾。

3) フランス語の後退

フランス語の優勢な状態も、13世紀に入り、英国王家のフランスでの勢力が弱まるにつれ、徐々に崩れていった。「領土喪失王 (Lackland)」のあだ名のあるジョン王 (King John (1199-1216)) が、仏領内の英領土をフランスに没収された頃 (ノルマンディの喪失 (1204)) から、英・仏に領土を持っていた貴族は、法律によって、フランス、英国両国への二重忠節を放棄せざるを得なくなった⁽⁶⁾。つまり貴族は、英国あるいはフランスのいずれかに財産を持つことを求められた⁽⁷⁾。フランスよりも英国を本拠地に選んだ貴族は、英国に留まることにより、英国の意向に従う態度をとるようになり、必然的に英国人化していった。当然英国内でフランス語を使用する機会は減少し、また使用する理由もなくなり、13世紀半ばになってようやく彼らは、自分自身を英国人と見なすようになった⁽⁸⁾。

一方、ジョン王の後継者のヘンリー3世 (Henry III (1216-72)) は、趣味は全くフランス的で、婚戚関係もすべてフランス人であった。その

ため彼は、フランス人や英国以外の外国人を優遇し、彼の長い治世の間に、英国は、外国人に食いつくされたのである⁽⁹⁾。その結果彼の政策は、英国人としての意識が芽生えていた人々の排外思想・国家感情に火をつけることになった。つまり外国人に対する反感が、愛国心の中心基盤となり、地方豪族や中層階級の人々を共通の目的に向かって団結させ、英国全土に外国人に対する敵意をよびさました。今では自分たちが英国人であると思っている人々は、ヘンリー王の恩恵を受けている新参者とは違うという意識を強め、団結した⁽¹⁰⁾。言語的には当然彼らは、自国語である英語の使用に固執するようになった。事実、外国人に対する非難のひとつは、彼らが英語を知らないことであり、英国人ならばある程度英語を知るべきだと考えるようになった⁽¹¹⁾。

こうして徐々に英語は、母国語として地位を確立していった。当時の上流階級でも、フランスでの利権が少なくなるにつれ、英語の使用が一般化し、フランス語は単に学習される言語 (a cultivated tongue) となり、議会、法廷など非常に限られた場でしか使用されなくなった⁽¹²⁾。また最も保守的な機関とされた教会や大学でも、英語を話す傾向が強くなり、いくつかの大修道院では、修練士が学校や僧院内で英語を使用することを禁じ、会話はすべてフランス語にすべきであるという規定を採用した。大学でも、英語よりもラテン語やフランス語の使用が要求された⁽¹³⁾。

1-2. 後期中世英語時代 (1300-1500 年)

1) フランス語の衰退

14世紀になると、フランス語の勢いは急速に弱まっていった。フランス本国では、カペー王朝 (the Capetian power) が栄えるにつれ、パリが政治の中心となり、言語的にもパリ地方の方言がフランス語の標準語と見なされるようになった。そのためそれまでノルマン系の人々が使っていたフランス語は、いわゆるノルマンディ地方の方言 (Norman French) にすぎなかった。彼らの使っていた言葉は、ノルマンディ方言の特徴だけでな

く、英語の特性にも強く影響され、フランスの他の方言とも違ったもの (Anglo-French) になってしまい、文学作品などで嘲笑され、見下されるようになった¹⁴⁾。

それと同時に英国社会でも大きな変化が生じた。まず英・仏の利害の対立 (フランドルの内乱) が起こり、相互の敵対感情が増大し、ついに百年戦争 (1337-1453) に突入した。英国では、反フランス感情が高まり、フランス語は敵国の言語 (the language of an enemy country) と考えられ、フランス語廃止の方向へ進んだ¹⁵⁾。

また 1348 年、49 年、50 年に黒死病 (ペスト (black death)) が西ヨーロッパを襲い、英国でも多くの人々が死亡した。その死亡率は低階層で最も高く、下層階級の農業労働者の数が激減し、深刻な労働力不足を引き起こした。そのため、荘園領主は、農村の労働力の確保のために彼らの待遇改善を図った。皮肉にも伝染病という不幸な出来事から、逆に労働者階級の経済的重要性が増大し、彼らの賃金や社会的地位は上昇、改善されていった。当然彼らの使用していた英語の重要性も高まった。

さらに市民が封建的な抑圧から逃れ、自由を享受するようになるにつれ、いわゆる中流階級が出現した。特に商業に従事していた商人や職人は、自分たちの保護と利益のために団結して商業組合 (ギルド (guild)) を結成し、自主性を持つと同時に、市政にも参加するようになった。中には政治を左右するような大富豪もいたが、大半は、農民と貴族の間に位置する文字通り中流 (中産) 階級であった。こうして市民の活動、商業 (貨幣経済) の発達により、荘園制を基礎とした自給自足の封建経済は崩れ、土地に代わる新しい富の形態が生じ、中流階級の人々は増え、成長していった。それと共に、彼らの共通の言語である英語も国中に広まっていった。

このような社会的・経済的变化のために、今までのフランス語よりも英語を使用することにより利益を得る人々が増え、その結果、英語の母国語としての地位が高まり、逆にフランス語は習得すべき外国語の地位に留まっていった。

2) 英語の普及

労働者階級の地位の急速な向上と共に、英国国民の地位も向上し、裕福な中流階級が多く出現してきた。当然そのような大衆に娯楽を提供する文学作品も英語で書かれるようになった。事実、作者の序文の説明から判断すると、14 世紀初めにはすべての人が英語を知っていたと思われる¹⁶⁾。

このような英語の全国的な普及をさらに促進したのは、学校、議会、法廷での英語の使用である。1349 年の黒死病 (ペスト) 発生以後、ジョン・コーンウォール (John Cornwall) がグラマー・スクールの教育法を改正し、今までのフランス語による授業内容や物事の理解から、英語を媒体とする授業に改めた。その結果 1385 年には英国のすべてのグラマー・スクールでは、学生はフランス語ではなくて英語で理解し、学ぶようになった¹⁷⁾。

議会では英語の使用が散発的ではあるが、早くから使用されていた。1295、1344、1346、1376 年の議会では、フランスとの戦争継続のための支援を得るために、「フランスが勝利すれば英国国語は絶滅するであろう (A French victory could annihilate the English language)」¹⁸⁾ という建前論が議論され、このような内容をフランス語やラテン語で行っていたとは思われない。また 1362 年には、議会が、大法官の英語の演説によって開会された。その時の議題は、訴訟当事者がフランス語を理解できないためにすべての法廷の手続きは英語を用いるという「訴答手続き法令 (Statute of Pleading)」であった。同法令は、英語での裁判を求め (ただし記録はラテン語にする)、英語が公式に認められた画期的な事件であった¹⁹⁾。その後英語の使用はますます増え、1388 年の絹織物商ギルドの請願、1397 年判事リックヒル (Judge Rikhill) の判決、1399 年主任判事サーニング (Chief Justice Thirnyng) の判決がそれぞれ英語でなされた。15 世紀になると、議会 (1403、1404、1405、1411、1414、1421 年) での英語使用が認められ、特に 1422 年ヘンリー 5 世が死亡し、ヘンリー 6 世の時代になると英語が頻繁に使われ、1450 年までには英語が支配的になった²⁰⁾。

2. 英語通信文の発生

1) 口頭から文書(記録)への転換

英国政府の確立と共に、官僚制度が整備され、記録(保管)の重要性が認識されるようになった。土地売買や法律などに関する公的な書類が、従来の口頭による宣誓(oral testimony)よりも重視されるようになったのは12世紀前後と思われる。リチャード1世(Richard the Lion-Hearted (1189-99))の時代が法律上の記録重視の始まりで、これ以後ビジネス取引の法的な証拠を求める人は、宣誓証言よりも文書に信頼をよせるようになった²⁰⁾。

12世紀以降の文書の急増は、次のような影響を英国社会に与えた²¹⁾。まず、専門家としての写字者(scribe(s))や書記(scrivener(s))などの職業が現れた。彼らは、書くことを職業にする最初の専門家(コンサルタント)(the first professional business writing consultant(s))であり、単に書類を一枚一枚写すことから、請願(petition(s))、遺書(will(s))、財産の所有権の移転(transfer(s) of property)などに関する法律的に高度な正式文書の作成まで関係した。その後彼らのうちの一部は、ビジネス・ライティングの専門家として学校(大学)で教えたり、教科書やレター文集(formularies)の作成に従事した。

次に、英国国民の間での実務教育が拡大した。聖職者や貴族は当然のこと、農民でさえもラテン語を理解するために、読むことの方が求められるようになった。また政府が記録保管所(archive(s))を創ったために、地主や郷土(country gentry)はそれを見習い、レターや法律文書の作成のための専門の写字者や文書の整理・保管のための秘書を置いた。当時の地主たちは、自分の土地の権利を証明するために、必要に応じ政府に申請し、証明書を発行してもらう必要があり、非常に面倒で時間がかかった。そこで彼らは、重要な書類の写しを自分の手元に保管しておくか、あるいは自分の弁護士(attorney)がすぐ見られるような場所への保管を考えたのである。こうして文書の保管が重

要になるにつれ、彼ら自身も文字を読むだけでなく書くことも学ぶようになった。14世紀頃までには、貴族、郷土、聖職者、専門家の間での広い(しかし浅い)「読み・書き(literacy)」のための教育が広まった。

記録(文書)を重視することは、「読み・書き」の教育を人々に広めていったが、当時の書き言葉は、主にラテン語とフランス語であった。1400年頃までには、すでに上流階級の貴族でさえ、英語を話し言葉として使用しており、英国全体に英語は普及していたが、書き言葉としての英語は、まだ社会的には認められてはいなかった。

2) 文書用語としての英語の使用

14世紀半ば以降には、英語が、学校や公的な場での使用が認められるようになり、話し言葉としての英語は、広く国民に普及した。しかし、書き言葉としての英語は話し言葉ほど一般的ではなかった。例えば、法廷での英語使用は認められたが、それは弁論のための(話し)言葉にすぎず、記録は依然としてラテン語で行われていた。当時のラテン語は、ヨーロッパの国々ではどこでも通用し、教育のある人ならば、ラテン語を共通語にして、話したり書いたり、何不自由なくコミュニケーションが可能であった。一方当時の英語は、まだ確立した言語とはいえず、不安定で乱雑、しかも絶えず変化しており、数世紀という長い年月を経てすでに言語として確立していたラテン語の方が便利であった。このようにラテン語の国際的な性格と、完成した言語のために、記録に残す作業は主にラテン語に依存した。

このような強力な言語であるラテン語に対抗したのがフランス語であった。ノルマン人の征服以後英国でのフランス語の影響力が強くなるにつれ、知識階級の人々や著名人が競ってフランス語で書くようになった。1350年頃には、フランス語の最盛期ともいえ、議会や法廷では話し言葉としてだけではなく記録のための言語として採用され、また私的あるいは半公的な通信文はほとんどフランス語で書かれた²²⁾。その後英語が普及してきてもフランス語は、外交の言葉(the language of

diplomacy)として生き残った。当時の外交書簡では、相手国(受取人)の言語で答えることが習慣となっており、フランス語圏の指導者にはフランス語で、それ以外(ローマ法皇や非フランス語圏の指導者)に対してはラテン語で書かれるのが一般的であった²⁴⁾。

しかしその後、英語が普及してくるにつれ、英語で書かれることも多くなってきた²⁵⁾。1383年には英語で書かれた最初の遺言状があり、1397年ケント伯の英語の遺言状、そして15世紀になるとヘンリー4世(1399-1413)、5世(1413-22)、6世(1422-61)もそれぞれ英語で遺言状を書いている。

ギルドでは、1345年、ロンドン香辛料業者の条令がフランス語と英語で出され、1400年、ヨークの同業組合の条令が英語で書かれた。

議会では、1423年以前の記録はフランス語であったが、それ以降は英語でも頻繁に書かれるようになった。町でも1430年、条令や慣例集を英語に翻訳し、1450年以降議事録は英語となった。

法令は前述したように、英語の使用が最も遅く、1300年頃まではラテン語で、ヘンリー7世(1485-1509)が即位するまではフランス語で、1485年にはフランス語と英語の併用が見られ、やっと1489年以降英語のみとなった。

このような歴史的事実から、15世紀には、英語が、それまでのラテン語、フランス語にとって代わって、書き言葉としてもその地位を確立したといえる。

3) ヘンリー5世(Henry V; 1413-22)の影響

ヘンリー5世も就任当初は、書き言葉として当時主流であったフランス語かラテン語を使用していたと思う。しかし、1417年8月5日(フランスへの2回目の侵略の4日後)に母国語(vernacular)に転向し、その後死ぬまで英語の公・私文書を本国に送り続けた²⁶⁾。彼が母国語(英語)を使用したのは、明らかに戦争のための支援を議会や国民から得ることであった。かつてフランスとの戦争を正当化するために、フランス人が英国国語を破壊しようとしていると喧伝されたが、彼の英語使用もこの種の宣伝(propaganda)の延長線上にあっ

た。このような戦術転換(英語の使用)により彼は、首尾よく上流階級からの支援は得られなかったかもしれないが、中流階級の人々に対しては、愛国心を奮い立たせることに成功したであろう。彼らは、実質上戦費の大半を負担しており、常々自国語以外のラテン語やフランス語の使用に不便さを感じていた。さらに彼らは、外国のものを好まず、当時は英国領土から外国人(ウェールズ人も含む)を排除する動きもあった。このような状況下で、ヘンリー5世は、自分の野心を満たすために、愛国主義的な表現(patriotic flourish(es))を多用し、英国国民のナショナリズムを高揚させることに努めた²⁷⁾。

例えば、下記のレターは、彼がルーエン(Rouen)攻撃のためフランスに滞在していた時、ロンドンの市長(Mayor)ならびに議員(Aldermen)宛てに出したものである。そのレターの中で彼は、自分の要求を宗教心(religious sentiment(s))に訴えることにより少し和らげ、同時に、自分が行っている戦争に対して神の加護があることを示唆すると共に、言外に、自分(王)に援助すれば同じように神の祝福が得られると述べている。そして彼は、中層階級の人々に過度にへつらうことはなく、また帰国したあかつきには何らかの王の恩恵(royal favor)が与えられるかもしれないということをもそれとなく漂わせている。しかも自分の要求はちゃんと伝えているのである²⁸⁾。

Right trusty and wellbeloved, we greet you well. And forasmuch as, in the name of Almighty God and in our right, with His Grace we have laid the seige before the city of Rouen (which is the most notable place in France save Paris), at which seige we greatly need refreshing for us and our host, and we have found you true lieges and subjects at all times to do all things that might do us worship and ease; whereof we can thank you right heartily and pray you effectually that in all haste you will arm as many small vessels as you can.[Here follow explicit directions for getting to Rouen by water.] ... knowing well also that thereby you may do us right great pleasance and refreshing for all our above-

said host, and given us cause to show therefor to you ever the better lordship in time coming, with the help of our Savior, the which we pray that He have you in his safe keeping. Given under our signet [seal] in our host before Rouen the X day of August [1419].

また下記のレターのように、彼は、同時代の美辞麗句を並べた仰々しい書き方をせず、いわゆる果断の人 (a man of decision) らしく、飾らずに簡潔で要領よく核心に触れている²⁹⁾。

Tiptoft,

I Charge yow, by the Feith that ye owe to me that ye kepe this Matere, her after Writen, from al Men secre save from my Brother Th'Emperor owne Persone; that never Creature have Witting thereof, withowt myn especial Commandement, of myn owne Mouthe, or els Writen with myn owne Hand, and Seely'd with my Signet.

このように彼は、言葉の価値というものを十分認識していた。当時フランスとの外交交渉において、条約や協定にどの言語を使用すべきかいつも対立しており、英国側は、フランス語よりもラテン語の使用を主張した。これは、外交言葉 (フランス語) の解釈について、フランス人の有利にならないようにという思惑からであった³⁰⁾。

彼の目的は何であれ、彼が、公的な書き言葉として英語を十分活用したために、英国国民は、英語を容易に気がねなく使えるようになり、英語に対し尊敬の念 (respectability) を持つようになった。上流階級の頂点ともいえる王が、英語を書き言葉として使用していることから、一般大衆は、「国王が自ら英語でお書きになる」ということを知り、そのことが、英語の使用を積極的に勧めたことになる。例えば、(ビール) 醸造業者のギルドは次のような決議文を発表した。

Whereas our mother-tongue, to wit, the English tongue, hath in modern days begun to be honorably enlarged and adorned; for that our most excellent lord King Henry the Fifth hath, in his letters missive, and divers affairs touching his own person, more willingly chosen to declare the secrets of his will[in it], and for the better understanding of his

people, hath, with a diligent mind, procured the common idiom (setting aside others) to be commended by the exercise of writing; and there are many of our craft of brewers who have the knowledge of writing and reading in the said English idiom, but in others, to wit, the Latin and French, before these times used, they do not in any wise understand; for which causes, with many others, it being considered how that the greater part of the Lords and trusty commons have begun to make their matters to be noted down in our mother tongue, so we also in our craft, following in some manner their steps, have decreed in future to commit to memory the needful things which concern us.³¹⁾

「我々の母語、すなわち英語は、近來見事に拡大されて美しくなり始めた。というのは、恐れ多くもヘンリー5世陛下は、公式書状や、御自身に関する種々の事柄において、進んで御意向の秘密を「英語で」御表明くださり、国民がよりよく理解するように、御熱意を込めて、(他の言葉を退け) 国民共通の言葉でお書きになってそれを御推奨された。また我々醸造業者の中には、英語で書いたり読んだりする知識を持っているものは多いが、他の言葉、すなわち以前使われていたラテン語やフランス語では、彼らは少しも理解できない。以上の理由、およびその他多くの理由で、上院や信賴すべき下院もほとんどが議事を英語で記録し始めていることを考えて、我々も我が醸造業において、ある程度彼らの歩みにならって、我々に関係のある必要な事項を今後「英語を用いて」記録することに決めた。」³²⁾

残念ながら、彼は病気のため短命に終わった(1422)が、その後のヘンリー6世(Henry VI)ならびに政府は一貫して英語の使用を勧め、英語で書かれた文書を公式なものとして認めたり、写字生や弁護士などに英語で書かれた書類の提出を求めた。こうして英語の通信文は、1425年を転機として³³⁾、以後急増することになり、ヘンリー5世は、アングロ・サクソン時代以後書き言葉として英語を使用した最初の王(the first English monarch to use written English regularly since Anglo-Saxon times)³⁴⁾といえる。

3. 英語通信文の実例

15世紀になってようやく書き言葉としての地位を確立した英語が、ヘンリー5世の影響を受け、通信文として、実生活(ビジネス)の場でどのように使用されていたかを具体的に知るために、ここでは、当時(15世紀)のレターを調べてみることにする。

1) 15世紀のレター

15世紀の書簡集としては、パストン(Paston)、ストナー(Stoner)、セリー(Cely)、プランプトン(Plumpton)家などのレターがあげられる。当時は現在のように、公的な通信文と私的なものとの明確な区別がなく、レターの筆者は一般に、公的な内容に私的な事柄を加味している。しかし大半は、当時のビジネスに関するもので占められており、現在のいわゆるビジネスレターといえる⁹⁰⁾。その中から、入手可能なパストン・レター(The Paston Letters)とセリー・レター(The Cely Letters)を検討する。

1)-1. パストン・レター(The Paston Letters)

本レターは、裕福なノーフォーク(Norfolk)のパストン家保有の書簡集(457通)で、15世紀から16世紀前半にわたっているが、ほとんどのレターは、1450年から1490年までに書かれている。パストン家は、工業化以前(preindustrial)のヨーロッパでは最大のビジネスのひとつであった土地の取引(landowning)に関わっていた。内容的には、土地取引に関するビジネスのことから、当時の政治や法律に関すること、さらに家族の問題

(トラブル)まで広い範囲に及んでいる。

1)-2. セリー・レター(The Cely Letters)

本レターは、1470年から80年にかけてロンドンのウール取引(wool trade)に従事していた中流階級の商人(middle-class merchant(s))であったセリー家の書簡集(247通)である。セリー家のレターは、パストン・レターと異なり、ほとんどのものが筆者本人により書かれており、英語のスペルは、想像を絶するほどばらばらで千差万別(the indescribable chaos of English spelling)である⁹¹⁾。またセリー家の人々は、ビジネスで忙しかったせいか、文体や表現に余りこだわらず、比較的自由に、簡潔に用件を述べる方法をとっている。

1)-3. 対象レター

当時の特徴を拾い出すにはなるべく多くのレターを対象とした方が良いのは当然であるが、上記の書簡集には、宛て名や差出人が不明のものや、原稿(draft)段階のもの、メモ(memorandum)などが含まれている。本稿は、ビジネスレターの観点からの検討を目的としているので、原則として、レターの形式を整えているもの限定した。

その原則に則りさらに、家族間の通信と家族以外からのものに分けた。前者は、同一人物同士のある程度部数のまとまったものを選び、後者は、受け手をそれぞれの家族から一番多く名宛人になっている中心人物を選び、その人宛てのレターを中心に検討する。

その結果、パストン家の対象レターは、総数163通(家族間:118通, 家族以外:45通)、セリー家の対象レターは総数197通(家族間:89通, 家族以外:108通)となった。

対 象 レ タ ー 数

	関 係		from	to	レター数
	家族	関係			
パ ス ト ン ・ レ ター	夫婦 親子	妻→夫	Margaret Paston	John Paston	36
		母→子	"	Sir John Paston	11
		母→子	Agnes Paston	John Paston	7
		子→母	Sir John Paston	Margaret Paston	9
		子→母	John Paston	"	8
		兄弟	Sir John Paston	John Paston	30
	兄弟	弟→兄	John Paston	Sir John Paston	17
					(118)

	家族以外	James Grashman Richard Calle John Russe Thomas Playters (various persons)	John Paston " " " "	6 5 5 5 24 (45)		
合 計				163		
セ リ ・ レ タ ー	家族 親子	父→子	Richard Cely the elder	George Cely	30	
		子→父	George Cely	Richard Cely the elder	7	
		兄弟	兄→弟	Richard Cely the younger	George Cely	47
			兄→弟	Robert Cely	"	5
		(89)				
	家族以外		William Cely	"	32	
			"	Richard & George Cely	33	
			William Maryon	George Cely	12	
			John Dalton	"	11	
			Thomas Kesten	"	6	
			(various persons)	"	14	
		(108)				
合 計				197		

2) レターの基本スタイル

当時のレターは、公・私の区別がはっきりしていないとはいえ、一応記録に残る性格上、ある程度の共通の形があると予想される。一番分かりやすい最初の部分 (Beginning) と終わりの部分 (Ending) を検討する。

2)-1. 分類の方法

(1) 最初の部分 (Beginning)

多数のレターを整理しやすくするために、ここでは4つのパートに分けて考える。

(1)-1. 1st part:

A:				
			2. full	1. entirely
		3. most		
	4. my			
		5. right		6. heartily
7. to			8. own	
			9. noble	

文字通りレターの書き出しで、レターの筆者が相手に失礼のないように十分配慮しなければならないところである。言い換えると、レターの筆者は、レターの受け手に対し好意と尊敬の念を持って呼びかける必要がある。一般に関係者の身分関係が端的に現れる表現が多く見られる。いわゆる現在の "Salutation" に該当し、通常 D が中心となる。当時の特徴ともいえるべき仰々しい修飾語句が多く、そのため整理上、D に至る形容詞、副詞を順番に A, B, C の部分に分けて考える。

- B :
1. beloved
 2. dear
 3. honourable
 4. reverend
 5. reverend & worshipful
 6. reverent
 7. reverent & well-beloved
 8. reverent & worshipful
 9. trusty
 10. trusty & well-beloved
 11. well-beloved
 12. worshipful
 13. worshipful & reverend
 14. worshipful & reverent
 15. worshipful & well-beloved
 16. worthy (&) worshipful

C :

			1. beloved 2. betruſted	
		3. entirely	4. eſpecial 5. faithful	
9. my	6. full		8. honourable	7. good
	10. moſt		11. reverend 12. reverent	
	13. right		14. ſingular 15. ſpecial 16. tender	
		17. tenderly	18. truſty	
	19. very		21. true	20. kind

D :

Family	Friend	Business 関係
2) brother 3) couſin	1) bedfellow	
7) huſband	4) friend 5) friend & godfather 6) friend & lover	8) lord 9) (in our) lord god 10) maſter 11) maſters
12) mother		13) ſir 14) ſirs
15) ſir & brother 16) ſon 17) father		18) lady & miſtreſs
19) wife		20) miſtreſs

(1)-2. 2nd part :

本来なら本文はここから始まる。レターの筆者が相手に失礼にならないように、へりくだった挨拶を行う部分である。ここでも種々の修飾語句が

あり、細かい分類となる。中心はAの部分で、それに続くB (-1/-2/-3) は、不要と思われる表現が多く、仰々しい。

A : 1. Commend :

- 1) I commend me to (unto) [you/your good mastership].
- 2) I heartily commend me to (unto) [you/].

2. Greet :

- 1) I greet you well,
- 2) I greet you,
- 3) I greet well,

3. Recommend :

- 1) I recommend me (& c./heartily) ,
- 2) I recommend me to (unto) [you/
your reverence/
your (good (& proved)) mastership/
your gracious lordship],
- 3) I recommend me lowly to (unto) [you/],
- 3') I lowly recommend me to (unto) [you/],
- 4) I recommend me heartily to (unto) [you/],
- 4') I heartily recommend me to (unto) [you/],
- 4") I recommend me to (unto) [you/] heartily,
- 5) I beseech you to recommend me to (unto) [you/],
- 6) I heartfully & sorrowfully recommend me to (unto) [you/],
- 7) I humbly recommend me to (unto) [you/].

4. Recommendation :

1) after					
	2) all				
		3) due			
		4) duties of			
	5) full				6) had
			7) heartily		
			8) humble		
	9) most				
	9') my most				
		10) the order of			11) preceding (pretending)
				12) recommendation(s)	
				13) reverence & recommendation	
					14) stated first
15) with			16) special		

B-1 :		1) all				
				2) due	3) heart	
			4) manner of			5) most lowly
		6) my		7) poor	8) reverence	
					9) service	
				10) simple		
11) with						12) preceding

B-2 :	1) as	heartily	as
	2) as	humbly	as
	3) as	lowly	as
	4) as	tenderly	as
	5) in as	heartly	way as
	6) in as	diligent	way as
	7) in as	low	way as
	8) in as	humble	way as
	8') in my most	humble	way(s)
	9) in the	best	ways
	9') in my	best	way
	10) in the most	lowly	way
	11) in the most	lowest	way(s)

B-3 :					
		1) can			
		2) can or may			
			3) dewyse or think		
	4) heart				
	5) I				
		6) may			
	7) she				
8) that			9) think		
10) as				10") on my part appertained	
			11) submit me lowly unto		
			12) as unknown		
				13) your good [fatherhood]	
					14) & proved [mastership]

(1) -3. 3rd part :

2nd part と同じような役割を持ち、挨拶の重

複にすぎず、表現がくどくなる。必ずしも必要とされず、余り一般的ではない。特定の関係の人々

10. I	1. beseech 1'. beseeched 2. beseeching 3. blessed by						
			6. for charity	7. God (God's)	5. daily	4. blessing 4'. blessing & remembrance	
					9. humbly		8. God's
			13. of			11. it	12. mine
	15. send		16. to have				14. prayer(s)
19. your poor priest		17. you		18. your			
			20. with 21. at reverence of God take heed 22. to recommend me unto				

の間で使用されたものと思われる。

(1)-4. 4th part:

いよいよ用件に入るところで、レターの受け手

の注意を引くように工夫されている。今までの
仰々しさと異なり、ここではレターの筆者の意図
が示され、ある程度ビジネスライクである。

1. advise [you] (to think)

2. Beseeching:

1) beseeching you heartily, (at the reverence of God,) (to help)
(as my whole trust is in you,) (that)

2) beseeching you most tenderly (to see)

3. certifying [you] (that)

4-1. Desire:

1) I desire (to hear)

2) (I) desire for (to hear)

3) (I) heartily desire (to hear)

2. Desiring:

1) (evermore) desiring (to hear/know (of))

1') desiring (ever) (to hear/)

- 2) desiring (for/of)
- 3) desiring heartily (greatly) (to hear of)
- 3') heartily desiring (to hear of)
- 4) desiring [you] (to)
5. (I) fear [me] (that)
6. for in truth (I) (hear)
7. if it may in any way suffice,
8. Inform :
 - 1) informing [you/your mastership]
 - 2) where you should be informed (that)
9. Know :
 - 1) doing you to know (that)
 - 2) sending you knowing (that)
10. Let :
 - 1) (I) let [you/him/] (know/have knowledge of]
 - 2) letting[you/your mastership] (know/have (in) knowledge/understand/) (that)
11. Like :
 - 1) like [you/your mastership] (know/to know/) (that)
 - 2) like it [you/] (to know/have in knowledge) (that)
 - 3) if it like [you/] (that)
 - 4) liked it [you/] (to know/) (that)
12. Marvel :
 - 1) I have great marvel (that)
 - 2) I marvel (that)
- 13-1. Please :
 - 1 it please (that)
 - 2) it please [you/your good mastership/your (worshipful) mastership]
(to know/to undersdtand/to have knowledge)
 - 3) it please you,
 - 3') if it please you,
 - 4) please [you/] (to know/) (that)
 - 5) please it [you/] (to know/to be informed)
 - 6) please it [you/] (of)
2. Pleased :
 - 1) pleased [you/] (to know/) (that)
 - 2) pleased it [you/] (to know/) (that)
 - 3) it pleased [you/] (to send/take (me))
 - 4) pleased it (to understand/)
- 14-1. Pray :
 - 1) (I) pray [you/] (know/to know/to remember/) (that)
 - 2) I pray [you/] (that)
 - 3) I pray [you/] heartily (to be)
2. Praying :
 - 1) praying [you/] (know/to know/to remember) (that)
 - 2) praying [you/] (for)
 - 3) praying [you/] (that)
 - 3') praying (that)
 - 4) praying [you/] heartily (that)
 - 5) praying [you/] heartily, . . . , (to)

15. promise [you] (that)
16. Say :
 - 1) we say (that)
 - 2) I should say (that)
17. it is so (that)
18. (I) am right sorry (of) (that)
- 19-1. Thank :
 - 1) I thank [God/you/your (good) mastership/],
 - 2) I thank [you/], (for)
 - 3) I thank [you/] heartily (of)
 - 4) I thank [you/] (that)
 - 4') heartily I thank [you/] (that)
 - 5) my master heartily thanked [you/] (for)
2. Thanking :
 - 1) thanking [God/you/the good Lord/] (for)
 - 2) thanking [you/] (of)
 - 3) always thanking [you/] (of)
 - 4) heartily thanking [you/] (of)
 - 4') thanking [you/] (most/right) heartily (of)
20. I think
21. Understand :
 - 1) I understand (that)
 - 2) you shall understand (that)
 - 2') (I well) you understand (that)
22. Write :
 - 1) I write to you
 - 2) the cause why I write
 - 3) I have written (to my wife)
23. As :
 - 1) as for (news/the matter),
 - 2) forsomuch as (I hear),
24. To begin,
25. hold me excused (that)
26. as concerning (for) (the matter)
27. News :
 - 1) I send you good news (of)
 - 2) safety & c. news,
28. by the grace of God, I (have shipped)

(2) 終わりの部分 (Ending)

レターの筆者は、今までの本文のところで自分の用件を完全に述べ、これから結びの部分に入る。ここでも整理上分かりやすくするために4つのパートに分類する。

1. News:

- 1) as for news, here is non (none) (new, & c), (but)

(2)-1. 1 st part:

最後にくどくど述べる必要はなく、驚くほど簡潔に、自分の言いたいことはこれ以上ありません、これで終了です、というややぶっきらぼうな表現が見られる。

- 1') as for news I can none,
- 2) other news have we non (none) (here/here yet),
- 3) other news know I non (none) at this time,
- 4) of other news I can non write unto you,
- 4') as for any other news I can non write unto you,

2. No more :

2. I	3. can		5. (much) more	6. news	4. mastership(s)	1. at	
		8. send	7. no more				
	9. shall 10. should						11. this (present) time
				12. to (unto)	13. you 14. your (good) mastership 15. your (good) fatherhood		
	16. will	17. write					
	18. may no leisure have to						
		19. have we none yet, 20. till I speak with you,					

3. Send :

- 1) I shall hastily send you word of more things,
- 2) I shall send you word,
- 3) I shall send you a letter,
- 4) I shall send you more (knowledge),
- 5) I shall send you (other) news (of other things) hastily (in haste)
- 6) I shall write (to) you (with the next passage),
- 7) I would write more to you,

4. You-write :

- 1) (I thank you that) you would write to me (at the time).
- 2) (I pray (beseech)) you send me (us) (some word/good news/your advice/intent/writing)
- 3) (I pray) you let me have shortly word from you again.

5. Let: I shall let you have knowledge of other matters.

6. See: I hope to see you.

7. Forgive: forgive me, I write to make you laugh.

8. Tell:

- 1) I tell you more.
- 2) ---- can tell you more (than)

(2)-2. 2nd part:

ここでは、神に言及している表現が多い。当時の社会生活の中では、宗教が重要な要素であり、神の加護のもとに健康で幸せに、そしてビジネス

がうまくいくようにという願いがこめられている。整理上、神についての呼称を主語として (A)、それに続く表現 (B) とに区分した。

A: 1. Ghost:

- 1) The Holy Ghost

2. God:

- 1) God
- 2) Almighty God
- 3) Almighty God in Trinity
- 4) blessed by God, (which/who/whom)
- 5) by the Grace of God,
- 5') by God's grace, (who)
- 6) for the love of God, (which)
- 7) thanked by God, (who)
- 8) with God's grace, (whom/who)
- 9) with the grace of God, (who)

3. Jesu:

- 1) Jesu (Jhesu)
- 2) Almighty Jesu (Jhesu)
- 3) blessed by Jesu (Jhesu),
- 4) thanked by Jesu (Jhesu),
- 5) by the grace of Jesu (Jhesu), (who)

4. Lord:

- 1) Our Lord,
- 2) Our Lord Jesu (Jhesu)
- 3) Your lordship

5. Prince:

- 1) High & mighty celestial Prince

6. Trinity:

- 1) The Trinity
- 2) The Holy Trinity
- 3) The blessed Trinity
- 4) The blessful Trinity

7. Lady:

- 1) Our Lady, (who)

B: 1. Amend:

- 1) amend it,
- 2) amend them that would be contrary,

2. Be:

- 1) be with you,
- 2) be our good Lord, (who)

3. Bring :
 - 1) bring [you] well to (hither) . . . ,
 - 2) bring [you/my master] into (a better mood . . .),
4. Conserve : conserve yours,
5. Convey : (that) all things may be well conveyed,
6. Defend : defend, & c,
7. Keep :
 - 1) keep,
 - 2) keep [you/you both/you & us/you & (all) yours/you & all our friends]
 - 3) keep [you/] in all virtuous prosperity,
8. Know :
 - 1) that God knows, (who/whom)
 - 2) the which knows God, (who)
 - 2') that knows God, (who)
 - 3) that knows Jhesu, (who)
 - 4) that knows the blessed Lord, (who)
 - 5) as knowing Jhesu, (who)
9. Make : make you (right) a good man,
10. Please : would be right well pleased with all,
11. Pray : (I) pray you (heartily),
12. Preserve :
 - 1) preserve,
 - 2) (ever) preserve [you/you & (all) yours/you & all our friends/
your worshipful person/you (both) body & soul]
 - 3) preserve [you/] from (all) adversity,
13. Save : save (all) you,
14. Speed :
 - 1) speed you,
 - 2) speed you in your matters,
 - 3) speed you as well in all matters as I would you should do,
15. Thank : (I) thank God,
16. Trust : (as) I trust to [God/Almighty Jesu] you (all) shall be (well),
17. Amen,
18. Blessing :
 - 1) send God's blessing & mine,
 - 2) send you his blessing & mine,
19. Comfort : send you comfort of the Holy Ghost well,
20. Conclusion : send you a good conclusion in all your matters,
21. Desire :
 - 1) grant you ever your heart's desire,
 - 2) grant you ever your heart's desire, to your worship & profit,
 - 3) perform all your heart's desire in all matters,
 - 4) send you (all) your desires,
 - 5) send you your heart's desire, (in these matters and in all others)
 - 6) send you your heart's desire, with right,
22. Ease :
 - 1) send you your heart's ease,
 - 2) to your heart's ease & their confusion.

23. Grace :
 - 1) give [us/] grace to do,
 - 2) give [you/] grace to do as well as I would you did,
 - 3) give [you and us] all grace to live in peace,
24. Governance :
 - 1) have [you/] in (his) governance,
 - 2) have [you/] in his blessed governance,
 - 3) have [you/] (eternally) , . . . , in his merciful governance,
 - 4) it were yours, or in any way man's governance,
25. Guiding :
 - 1) have [you] in guiding,
 - 2) have [us] ever in his guiding,
26. Health :
 - 1) send you health,
 - 2) send you good health, (who)
 - 3) send you good health & greater joy in one year than you have had these seven,
27. Joy :
 - 1) send her joy of it,
 - 2) (send) greater joy,
28. Keeping :
 - 1) have in keeping,
 - 2) have [you/you & (all) yours] in (his) keeping,
 - 3) have [you/] in his merciful keeping,
 - 4) have [you/] in (his) keeping, [& all yours],
 - 5) (ever) have [you & all us/us all] in his blessed keeping,
 - 6) have [you/] in his blessed keeping, body & soul,
29. Leave : if (God) will give me leave,
30. Life :
 - 1) send you long life to endure to his pleasure,
 - 2) send you long life & good to his pleasure & yours,
31. Market : send me a good market for . . . and you a good market for . . . ,
32. News : send us good news from you,
33. Soul : Let Soul be well kept
34. Speed :
 - 1) be your speed in all your matters,
 - 2) send [you/] good speed in all your matters,
 - 3) send [you/] health & good speed in all your matters,
 - 4) send [you/] good speed in all that you will speed well in,
 - 5) send [you & all your company] good speed in your journeys,
35. Victory :
 - 1) deliver you of your enemies,
 - 2) send you (the) victory of (all) your enemies,
36. Worship :
 - 1) worship increasing to your life's ending,
 - 2) to his pleasance & your worship, and solace to all your well-willers,
37. Worship & profit :
 - 1) to your worship & profit,
 - 2) to his pleasure & to your worships & profits,

38. Luck: good luck,

39. Protection: have you in protection,

(2)-3. 3rd part:

遠隔地間の通信ということで、レターの筆者の

書いた場所ならびに日(時)を示す部分である。
表現はほぼ固定し、簡潔である。

9. In witness hereof	6. I	10. set my seal	13. written	2. at 3. from	5. hastily	8. in (right/great) haste	12. with	1. any (my) chancery hand
				7. in				4. full heavy heart
								11. the hand of your [brother (faithful) (&) fellow/ true loving friend]
								15. great pain
						14. (right) simply		

(2)-4. 4th part:

最後の署名のところで、修飾語句も簡潔で種類

も少ない。レターの筆者と受け手の関係を示す表現 (C) が中心となる。

A:

	1. all your
2. by	
3. from	
	4. le votre
5. per	
	6. your
	7. yours (& c)
	8. your own

B: 1. affectionate

2. continual

3. groaning

4. humble

5. humblest
6. lowly
7. poor
8. right poor
9. simple
- 9'. most simple
10. true
- 10'. true loving
11. very

C :	Family	Friend	Business 関係
			1) beadsman
		2) bedfellow	
	3) brother		4) chaplain
	5) cousin		
	6) father		
		7) friend	
		8) lover	
	9) lover & brother		
		10) man	
	11) mother		12) orator & beadsman
			13) priest
			14) priest & chaplain
			15) servant
			16) servant & beadsman
			16') beadsman & servant
	17) son		
	18) elder son		
	19) son & servant		
			20) well-willer
	21) wife		
	22) le filz		

- D :
1. at all times
 2. to (his/my) ability
 3. in that I can
 4. that I can or may
 5. at your commandment
 6. forever
 7. with heart & service
 8. to (his/my) (poor) power

2)-2. 共通の表現パターン

上記の分類方法に従って、パストン、セリー・レターをそれぞれまとめてみると、次のようにな

る（詳細については、添付資料（117-126 ページ）を参照）。

〔パストン・レター〕

① 家族間

- (1) 大婦 [妻から夫へ (from Margaret Paston to John Paston)]

A) 最初の部分

1st part は, 5. 12. 7) の組み合わせ, 2nd part は, 3. 2) が圧倒的に多用されており, 全体的にはほぼ一定の書き方になっている。3rd part は活用されていない。4th part は, おもしろいことに年代ごとに変わっている。前半の 40 年代は, 相手の幸せを祈る 4. 2. 3) が使われ, 50 年代はやや冗長であるが, 直さ的に相手に知らせる 14. 2. 1) が, そして 60 年代は同じように 13. 1. 5) が多用されている。

Right worshipful husband, I recommend me to you, desiring heartily to hear of . . .

(praying you to know that . . .)

(please it you know that . . .)

B) 終わりの部分

1st part の活用は少なく, いきなり 2nd part に入る。ここでは神の呼称として 6 [6. 3)] が用いられ, それに続く表現も 28. 2) が圧倒的に多い。3rd part は 13. 2 の組み合わせが多い。最後の 4th part はそれほど大きな差はないが, 年代ごとの違いが認められる。40 年代は 7, 50 年代は 7 と 2. 6 ならびに 2. 7 の組み合わせが増えている。

The blessed Trinity have you in his keeping.

Written at . . .

Yours, Margaret Paston

(By your, Margaret Paston)

(By yours, Margaret Paston)

(2) 親子

- (2)-1. 母から子へ (from Margaret Paston to Sir John Paston, knight)

A) 最初の部分

ほとんど同じような書き方になっている。自分の子供に対するレターのせい, 最初の呼びかけ (1st part) は省略され, いきなり 2nd part の挨拶から入り 2. 1) が多用されている。その代わり, 3rd part で相手の幸せを祈る表現の組み合わせ

(15. 17. 7. 4. 12) が用いられている。4th part は, 用件についてあなたに知らせますという 10. 2) の書き方が多い。

I greet you well, and send you God's blessing and mine, letting you know that . . .

B) 終わりの部分

1st part の活用はほとんど見られず, いきなり 2nd part の「神の加護」に言及している。ここでは, 2. 1) で始められ, 7. 2) が続き, 次に 34. 2) あるいは 34. 5) が使用されている。また戦時中ということを反映して勝利 (victory) を祈る [35. 2)] 用法も見られる。3rd part は 13. 2 が多く, それに 8 がつけ加えられている。4th part は身分を明確に表す 2. 6. 11) が圧倒的である。

God keep you.

(God send you good speed in all your matters.)

Written at . . . (in haste).

Per your mother, Margaret Paston

- (2)-2. 母から子へ (from Agnes Paston to her son John Paston)

A) 最初の部分

1st part の D で敬称なしで相手に呼びかける 16) が使われている。これは, 親子間の親しみを表しているように思われる。2nd part は, 2. 1) となっている。3rd part は, 年代の違いが明確に現れており, 40 年代は全く見られず, 50 年代になると幸せ祈願の表現 (15. 17. 7. 4. 12) が多用されている。4th part は相手に用件を知らせる 10. 1) が多用されている。

Son, I greet you well, and send you God's blessing and mine, and let you know that . . .

B) 終わりの部分

1st part の用法は見られず (1 回のみ), いきなり 2nd part の神に言及している。ここでは 40 年代の 4. 1) (1 回) から 50 年代は 2. 1) (5 回) に代わり, それに続く表現も 28. 2) と 2. 1) となる。3rd part は 13. 2. (8) の組み合わせ, 4th part は全部 2. 6. 11) の組み合わせになっている。

God have you in his keeping.

(God be with you.)

Written at ... (in haste).

By your mother, Agnes Paston

(2)-3. 子から母へ (from Sir John Paston to Margaret Paston)

A) 最初の部分

70年代前半までと70年代後半とでは年代によって微妙な言い回しの違いが見受けられる。70年代前半では、定まっていはいないが、尊敬の念が強く感じられ、1st partの呼びかけ(D)の12)の修飾語句(5. 12)が使われ、2nd partも1. 1)と決まっている。しかし3rd partでも愛情細やかな表現(1. 17. 13. 18. 4)が用いられている。一方、70年代後半の場合、母親に対する細やかな配慮は見られず、いきなり用件に入る方法が取られ、4th partでは13. 1. 5)が多用されている。

60's to early 70's:

(Right worshipful) mother, I recommend me to you, and beseech you of your blessing, and please it you to know that

Late 70's: Please it you to know that

B) 終わりの部分

年代間の差が見られ、前半部分とは逆に、60年代は用件が終わるといきなり3rd partに入り(13)、しかも結びの言葉もない。70年代前半は、かろうじて2nd partで神の加護に言及した上で[2. 1)], 3rd part(13. 2), 4th part[6. 17)]で結んでいる。70年代後半は最初の部分を省略したせいか、終わりの部分に気を使い、1st partは2, 2nd partは2[2. 1)あるいは2. 2)]と28. 2)の組み合わせ、3rd partは13. 2, 4th partは2. 6. 17)の組み合わせでまとめられている。

60's: Written

John Paston

Early 70's: God (or Jesu)

Written at

Your son, John Paston

Late 70's: No more, but God have you in his keeping.

Written at

By your son, John Paston

(2)-4. 子から母へ (from John Paston to Margaret Paston)

A) 最初の部分

ほぼ一定の書き方で統一されており、1st partは5. 12. 12)の組み合わせ、2nd partはAの4とB-2の3)とB-3の5). 1)の組み合わせ、3rd partは10. 1. 17. 13. 18. 4の組み合わせ、4th partは13. 1. 5)の組み合わせとなっている。

Right worshipful mother, after all duties of humble recommendation as lowly as I can, I beseech you of your blessing, and please it you to know (or understand) that. ...

B) 終わりの部分

いきなり終わる手法と、1st partの表現(ただし一定の表現はない)を活用した手法とに分けられる。2nd partでは2[2. 1) / 2. 8)]と12. 2)の組み合わせ、3rd partでは13. 2, 4th partは6. 4. [17)]. 15)の組み合わせが多い。

(....), but I pray God preserve you and yours.

Written at

Your son and humble servant, John Paston

(3) 兄弟間

(3)-1. 兄から弟へ (from Sir John Paston to his brother John Paston)

A) 最初の部分

1st partでは、呼びかけ(D)は弟へ対するものだけに当然2)が多用され(21回)、それに伴う修飾語句(5. 12または15)も半分以上は使用されている(13回、2)のみは8回)。2nd partは主に1. 1)と3. 2)が多用されている。3rd partの活用はなく、4th partは10. 2)が多用されている。

Worshipful brother, I recommend me to you, (I commend me to you,)

letting you know that

B) 終わりの部分

1st partはかろうじて2の使用が半分近く(14回)を占めている。2nd partは余り活用されていない。3rd partは13. 2が多用され、4th partは全く活用されていない。

No more.

Written at

John Paston

3)-2. 弟から兄へ (from John Paston to Sir

John Paston)

A) 最初の部分

1st part では相手への呼びかけ (D) は 13) が多用され、修飾語句も 5. 12 が半分以上を占めている。これは兄弟とはいえ、弟から兄へということで、年上に対する尊敬の気持ちを表しているものと思われる。2nd part は 3. 2) が多用されている。3rd part は男同士ということで活用されていない。4th part は一定の決められた表現を使うのではなく、なるべくいろいろな表現 [17/13. 1. 5) /11. 4)] が適当に活用されている。

Right worshipful sir, I recommend me to you,
and it is so that

(please it you to know that)

(liked it you to know that)

B) 終わりの部分

年代間の差が若干見られる。60 年代までは 1st part は活用されず、2nd part はほんの少し活用 [2. 1) と 12. 2)] されているにすぎない。3rd part は、半分は活用され (13), 半分は不要とされている。4th part も活用されていない。70 年代では、1st part は活用され (2), 2nd part では神の言及 [2. 1)] に続く表現はばらばらで、かろうじて 21 の使用 [21. 5) と 21. 4)] が見られる。3rd part は 13. 2 が多用され、4th part は活用されていない。

60's: (God preserve you.)

Written at

John Paston

70's: No more, God (send you and your desires.)

Written at

John Paston

② 家族以外

ここでは分類の整理上、John Paston に対するレターを集めた。

(1) from James Grashman to John Paston

A) 最初の部分

1st part の活用は 1 件のみで、不要とされている。2nd part は 4 [1. 3). 12). 6)] が多い。3rd part は活用されていない。4th part は 13. 1. 5) が多用されている。

After all due recommendation had, please it

your mastership to know that

B) 終わりの部分

1st part は 1 件のみで、不要と思われる。2nd part は活用されていない。3rd part は 13. 2. [8], 4th part は 6. 7. 15) が多少使用されている。

Written in haste at

Your poor (servant), James Grashman

(2) from Richard Calle to John Paston

A) 最初の部分

3rd part は不要とされているが、1st part, 2nd part は強いてあげればある一定の傾向が見られる。1st part は 5. 12. 10), 2nd part は 3 [3. 2) と 3. 3')] がある。4th part は 13. 2. 1) と 13. 2. 2) が多用されている。

(Right worshipful master, I recommend me to you,) pleased (it) your mastership to know that

B) 終わりの部分

1st part は不要とされており、2nd part は 3. 2) と 12. 2) の組み合わせ、3rd part は 13. 2, 4th part は 6. 7. 16) となっている。

Almighty Jesu preserve you.

Written at

Your poor servant and beadsman, Richard Calle

(3) from John Russe to John Paston

A) 最初の部分

3rd part を除き、他の part の一定の表現の活用が見られる。1st part は 5. 12. 13). 9. 13. 8. 10), 2nd part は 3. 2), 4th part は 13. 1. 5) が多用されている。

Right worshipful sir and my right honourable master, I recommend me to you, please it your mastership to know that

B) 終わりの部分

1st part の使用は、やや 2 (7. 12. 13. 1. 11) の用法が多い。2nd part は 3. 1), それに続く表現として 21 [21. 1) /21. 2) /21. 5)] と 12. 3) がある。3rd part は活用が少なく、あえてあげると 13. 2. がある。4th part は 6. 16') となっている。

(No more to you at this time,) Jesu grant you
your heart's desire and preserve from adversi-
ty.

(Written at)

Your beadsman and servant, John Russe

(4) from Thomas Playters to John Paston

A) 最初の部分

1st part と 3rd part の活用は見られない。2nd
part の活用は少ないが、あえていうと 4 [1]. 9').
16). 12)] となる。4th part は 13. 1. 4) となる。

(After my most special recommendation,
please your mastership to know that

B) 終わりの部分

1st part の活用は少なく、3rd part は不要とさ
れている。2nd part は 3 [3. 1) / 3. 2)] と 28. 5)
の組み合わせ、4th part は 6 となっている。

Jesu have you in his blessed keeping.

Your, Thomas Playters

(5) from various persons to John Paston

A) 最初の部分

3rd part の活用は見られないが、他の part で
は、レターの筆者が異なるので当然いろいろな組
み合わせが考えられ、一定のパターンを見つけ出
すのは容易ではない。あえて数の多いものを取り
上げてみると、1st part は 5. 12. 10) もしくは
13) の組み合わせが考えられる。2nd part は 3.
2) が多用されている。4th part はかなりさまざ
まな組み合わせになっているが、傾向的には 13. 1 が
多く、次に 19. 2 と 4. 2 となっている。

Right worshipful sir (or master),

I recommend me to you,

please it you to know that

(thanking you for)

(desiring to hear of)

B) 終わりの部分

1st part の活用の例は少なく、強いてパターン
を示すと、2 (7. 12. 13. 1. 11) が考えられる。2nd
part は 2 が強く、次に 6 が見受けられた。それに
続く表現は 28. 2) が多用され、3rd part は 13.
2, 4th part は 2. 6. 15) となっている。

(No more to you at this time,) God have you
in his keeping. Written at

By your servant, ----

[セリー・レター]

① 家族間

(1) 親子

(1)-1. 父から子へ (from Richard Cely the
elder to George Cely)

A) 最初の部分

簡潔な書き方で、1st part, 3rd part は全く活
用されていない。2nd part も A のみで、2. 1) に
統一されている。4th part もあまり活用されてお
らず、いきなり用件に入るまさしく現在のビジネ
スレターの基本ともなりそうである。

I greet you well, [I have received a letter]

B) 終わりの部分

最初の部分とは対照的にすべての part の活用
が見られる。1st part は 2 (2. 17. 7. 12. 1. 13.
1. 11), 2nd part は 3. 1) と 7. 2) の組み合わせ、
3rd part は 13. 2. 8, 4th part は 5 という具合に、
ほとんど一定の決められた表現が用いられてい
る。

I write no more to you at this time. Jhesu
keep you. Written at . . . in haste.

Per Richard Cely

(1)-2. 子から父へ (from George Cely to
Richard Cely the elder)

A) 最初の部分

3rd part は活用されておらず、その他の part
はすべて一定の表現に固定されている。1st part
は、5. 8. 17), 2nd part では 4 と 3. 2), B-2 の
11), B-3 の 8). 5). 2), 4th part は 13. 1. 5)
の組み合わせでほぼ統一されている。

Right reverent and worshipful father, after all
due recommendation preceding, I recom-
mend me unto you in the most lowest ways
that I can or may, furthermore please it you to
understand that

B) 終わりの部分

すべての part の活用が見られる。1st part は 2
(7. 12. 13. 1. 11), 2nd part は 3. 1) と 28. 2) と
17) の組み合わせ、3rd part は 13. 2, 4th part は
5. 6. 17) と一定の表現で統一されている。

No more unto you at this time, but Jhesu have
you and all yours in his keeping, Amen. Writ-
ten at

Per your son, George Cely

(2) 兄弟間

(2)-1. 兄から弟へ (from Richard Cely the
younger to George Cely)

A) 最初の部分

3rd part を除いたすべての part の活用が見ら
れる。1st part は 5. 11. 2), 2nd part の A は 3
(3. 2) / 3. 4)), 4th part は 8. 1) の組み合わせ
が多用されている。

Right well-beloved brother, I recommend me
unto you, informing you that

B) 終わりの部分

すべての part の活用が認められる。1st part
は 2 (7. 12. 13), 2nd part は 3. 1) と 7. 2), 3rd
part は 13. 2, 4th part は 5. 6. 3) ではば一定の
表現となっている。

No more to you (at this time), Jhesu keep
you. Written at

Per your brother, Richard Cely

(2)-2 兄から弟へ (from Robert Cely to
George Cely)

A) 最初の部分

対象レターが少ない (5 通) ので、明確な一定の
パターンを見つけ出すのは難しい。ここでも 3rd
part の活用は見られない。1st part は工夫してあ
るのか、いろいろな修飾語句が使用されており、
強いて傾向をあげれば、5. 11. 2) となる。ただ
関係を示す D のところで 2) だけでなく 13) と 2)
の組み合わせも考えられる。2nd part は 3. 4), 4th
part は 8. 1) と 13. 1. 5) の組み合わせが考えら
れる。

Right well-beloved brother (or sir and broth-
er), I recommend me heartily to you, further-
more informing you that

(please it you to know that)

B) 終わりの部分

3rd part は 13. 2), 4th part は 2. 6. 3) と一
定のパターンが認められるが、1st part, 2nd
part は明確にパターン化するのは難しい。

[(No more to you at this time, God have you
and all us in his blessed keeping, Amen.)]
Written at

By your brother, Robert Cely

② 家族以外

(1) from William Cely to George Cely

A) 最初の部分

3rd part の活用はないが、他の part の一定の
パターン化が見られる。1st part は 5. 12. 13, 2nd
part は 4 と 3. 3') の組み合わせ、4th part は
13. 1. 5) が多用されている。

Right worshipful sir, after due recommenda-
tion I lowly recommend me to your master-
ship, furthermore please it your mastership to
understand that

B) 終わりの部分

1st part は 2 が多いが、1. 2) も見受けられる。
2nd part は 3 (3. 2) / 3. 1) と 7. 2) の組み合わ
せ、3rd part は 13. 2, 4th part は 5. 6. 15) と
なっている。

No more unto your mastership at this time.
Almighty Jhesu keep you. Written at

Per your servant, William Cely

(2) from William Cely

to Richard & George Cely

A) 最初の部分

3rd part の活用は見られない。1st part は途中
から表現が少していねいな表現に変化している。
つまり前半は 5. 12. 11) が多かったが、後半は 5.
12. 14. 9. 12 (あるいは 4. 7, あるいは 15. 7), 11),
となっている。2nd part は 4 と 3. 3') の組み合
わせ、4th part は 13. 1. 5) が多用されている。

Right worshipful masters,
(Right worshipful sirs and my reverent mas-
ters,)
after all due recommendation, I lowly recom-
mend me unto your masterships, furthermore
please it your masterships to understand that
. . . .

B) 終わりの部分

ほぼ一定のパターンが見られる。1st part は 2
(7. 12. 14. 1. 11), 2nd part は 3 [3. 2) / 3. 1)]

と 12. 2), あるいは 7. 2) の組み合わせ, 3rd part は 13. 2, 4th part は 5. 6. 15) が多用されている。

No more unto your masterships at this time.
Almighty Jhesu preserve (or keep) you. Written at

Per your servant, William Cely

(3) from William Maryon to George Cely

A) 最初の部分

3rd part の活用はない。1st part は 5. 6. 13). 9. 15. 4), 2nd part は 3. 2), 4th part は 13. 1. 3) と 21. 2) の組み合わせというように, ほぼ表現が一定である。

Right reverent sir and my special friend, I
recommend me unto you. Furthermore, and it
please you, you shall understand that

B) 終わりの部分

1st part は 2 (7. 12. 13. 1. 11) がやや多い。2nd part は 6. 1) と 28. 2) の組み合わせ, 3rd part は 13. 2, 4th part は 2. 8 あるいは 5 のみとなっている。

No more unto you at this time, the Trinity
have you in his keeping. Written at

By your own, William Maryon

(Per William Maryon)

(4) from John Dalton to George Cely

A) 最初の部分

3rd part の活用は見られない。1st part では筆者の工夫がみられ, 適当に組み合わせを変えている。5. 11. 2) / 5. 12. 2) / 5. 1. 1. 2) の3つのパターンがある。2nd part では 4 と 3. 2) の組み合わせが多い。4th part は 21. 2) もしくは 13. 1 [13. 1. 4) / 13. 1. 5)] が使用されている。

Right well-beloved brother,
(Right worshipful brother,
(Right entirely beloved brother,
after all due recommendation had, I recommend me unto you.

Furthermore you shall understand that
(please (it) you to know that)

B) 終わりの部分

1st part は 2 (7. 12. 13. 1. 11), 2nd part は 3.

1) と 7. 2) の組み合わせ, 3rd part は 13. 2 もしくは 2 のみの場合が見られる。4th part は 2. 6. 3) か 6. 3) の使用となっている。

No more to you at this time, but Jhesu keep
you. Written at

(At)

By your brother, John Dalton

(Your brother, John Dalton)

(5) from Thomas Kesten to George Cely

A) 最初の部分

1st part の呼びかけ (D) で, 13) と 5) の組み合わせと単独 13) の使用が見られた。修飾語句を加えると, 1st part は 6. 13). 9. 15. 5) と 6. 13) の組み合わせが考えられる。2nd part は 3. 2) あるいは 4 (2. 3. 12. 6) の組み合わせが多い。3rd part は不要とされている。4th part はいろいろであるが, 強いていえば 13. 1. 5) となる。

Reverent sir and my special friend and godfather,
(Reverent sir,)

I recommend me unto you,

(All due recommendation had,)

please it you to understand that

B) 終わりの部分

1st part の活用はなく, 2nd part は 3 [3. 1) / 3. 5)] と 7. 2) の組み合わせ, 3rd part は 13. 2, 4th part は 5. 8 が多い。

Jhesu keep you. Written at

Per your own, Thomas Kesten

(6) from various persons to George Cely

A) 最初の部分

1st part は 5. 12. 13) が比較的多い。2nd part は 3. 2), 3rd part は不要と考えられている。4th part は 4. 2. 1) が多いが, 単独使用よりは, 他の表現と組で使用されている場合が多い。その次に 19 (19. 2 / 19. 1) が多く使用されている。

Right worshipful sir, I recommend me unto
you,

desiring to hear of, (and thanking you of
....)

(thanking you of)

(I thank you of)

B) 終わりの部分

1st part は活用されない場合がやや多くて、2と4が少し使用されている。2nd part は様々で、主に2と3があげられる。次に続く表現は28. 2)と12. 2)が多い。3rd part は13. 2, 4th part は様々な組み合わせがあるが、強いてあげると2. 6. 15)あるいは2. 7. - 8が考えられる。

[(No more to you at this time,)]

God (or Jesu) have you in his keeping.

(preserve you.)

Written at

By your servant, - - - -

(By yours to my power, - - - -)

2)-3. 表現パターンの傾向

今までの説明をまとめたのがIII-1, III-2表である。この表からわかるようにレターのスタイルにおいて一般的な傾向が見い出される。

[1: パストン家]

まず Margaret Paston は、妻として、また母としてレターを書いている。彼女はその役割に応じ、みごとに書き分けている。III-1表の①と②の比較からわかるように、Endingの3rd partを除き、表現において全く共通するものはない。これは、同一人物といえどもレターの相手の身分関係によって書き分けが必要なことを示している。つまり、彼女から見て、どちらかという上位にいる主人(夫)に対する場合と、下位にあたる子供に対する場合との違いといえるであろう。そのことを示すかのように全く同じ状況にある②と③を比べてみると、その類似性がはっきりとわかる。Endingの2nd partのBを除くと、表現はほぼ同じで、特にBeginningの3rd partは他ではあまり活用されていないのに、この場合には母親としての優しい心づかいが共通の表現として見受けられる。

次に Sir John Paston は、母と弟に対してレターを出しているが、書き方に関して Margaret Paston ほどの使い分けはしていない。BeginningのDは、当然相手によって異なるが、その呼びかけに対する修飾語は5. 12で同じものが活用

されている。同様に共通なものが見られるのは、Beginningの2nd partのA [1. 1)と3. 2)], Endingの1st part (2), 2nd part [2. 1) / 28. 2)], 3rd part (13. 2)である。また共通項の見られないところは、レターの相手先の違い(母親に対する場合と弟に対する場合)によるものと考えられる。つまり、⑤でも見られるように、母親に対しては優しい思いやり(Beginningの3rd partの活用)がなされ、4th partでも自分自身(息子)を明らかにしているが、弟に対してはいずれもその活用が見られない。

弟の John Paston も兄の Sir John Paston とほぼ同じような傾向が見られる。ただ兄との違いは、多少身分関係を考慮に入れ、兄よりもへりくだった表現が多い。母親に対する場合は、Beginningの2nd partのB-2, B-3の活用と、Endingの4th partにおける用法(4. 15)に見られ、兄に対する場合は、Beginningの1st partのDにおける表現(13)に見られる。

[2: セリー家]

セリー家の場合は残念ながら差出人がそれぞれ異なり、パストン家のように、レターの相手先による書き方の工夫については検討できない。ただ全般的に言えることは、各人の表現が一定しており、同一人物に対しても特定の表現を繰り返し使用する傾向がある。その意味では、たとえレターの相手が異なっても、Margaret Paston のように、相手に応じ適当に表現を変えることはあり得ない。セリー家の人々は、レターの体裁に気を配るよりも内容の伝達に力点を置いており、彼らの考え方は、現在のビジネスレターに近いと思われる。

3) 本文での言及項目

レターの筆者は当然、自分の言いたいことが相手に伝わればその目的は達せられる。しかし当時は、書くことがそれほど一般的でなく、しかも通信が頻繁に行われる状況ではなかったために、多くのレターが同じような事柄に言及している。

ここでは、当時の通信文で多くの人々が言及し

III-1. 1: パストン家の傾向

レター数	from	to	Beginning 1st part										Ending 1st part									
			2nd part										3rd part		4th part		3rd part		4th part			
			A	B	C	D	A	B-1	B-2	B-3			A	B	A	B	A	B	C	D		
① 37	Margaret Paston (妻)	John Paston (夫)	5	12	7	3.2)						14.2.1) 13.1.5) 4.2.3)	- 2(2.17. 7.12.13)	6.3)	28.2)	13.2	7	2.7				
② 11	Margaret Paston (母)	Sir John Paston, Knight(子)					2.1)				15.17. 7.4.12	10.2)	2.1)	7.2)	34.2) 23.2)	13.2	8	2.6		11		
③ 7	Aqnes Paston (母)	John Poston (子)				16	2.1)				15.17. 7.4.12	10.1)	2.1)	28.2)	2.1)	13.2	2.6		11			
④ 9	Sir John Paston (子)	Mrs. Margaret Paston (母)		5	12							1.17. 18.4	13.1.5) 19.1	2(7.1.11)	2.1)	28.2)	13.2	2.6		17		
⑤ 8	John Paston (子)	Mrs. Margaret Paston (母)	5	12		12	4(1.2. 4.8.12)	3	5.1)		10.1. 17.13. 18.4	13.1.5) 13.1.4)	2.1) 2.8)	2.1)	12.2) 21.4)	13.2	6	2.6		(17).15		
⑥ 17	John Paston (弟)	Sir John Paston, Knight(兄)	5	12		13	3.2)					17 13.1.5)	2(7.)	2.1)	12.2) 21.4)	13.2	4		5			
⑦ 30	Sir John Paston, Knight(兄)	John Paston (弟)		5	12 15	2	3.2) 1.1)					10.2) 14.2.3) 19.11)	2(7.)	2.1)	28.2)	13.2						

III-2. 2: セリー家の傾向

レター数	from	to	Beginning										Ending									
			1st part				2nd part						3rd part		4th part		2nd part		3th part		4th part	
			A	B	C	D	A	B-1	B-2	B-3					A	B			A	B		
① 30	Richard Cely the elder(父)	George Cely (子)					2.1)					- 4.1.2) 10.1)	2(2.17.7) (12.13.1.11)	3.1)	7.2)	13.2.8	5					
② 7	George Cely (子)	Richard Cely the elder (父)	5	8		17	4(3.2) (1.2.3. 12.11)		11	8.5.2		13.1.5)	2(7.12. 13.1.11) 1.4)	3.1)	28.2)/17	13.2	5.6			17		
③ 47	Richard Cely the younger(兄)	George Cely (弟)	5	11		2	3.2) 3.4)	11.1.6	3) 1)	4.1.9 5.1.3		8.1) 13.1.5) 19.1.2)	2(7.12.13) (1.11)	3.1)	7.2	13.2	5.6			3		
④ 5	Robert Cely (兄)	George Cely (弟)	5	11 6		2 13.2	3.4)					8.1) 13.1.5)	2(7.12. 13.1.11)	2	28.5)/17	13.2	2.6			3		

た項目を取り上げてみる。

(1) 健康(病気)や幸福について

黒死病(ペスト)の流行にみられるように、当時の人々は病気にかかりやすく、医療体制も不備で、十分な薬もなかったと思われるので、人の健康は非常に気がかりな問題であった。そのためレターでは、相手の幸せや健康を祈ったり、病気の状況や回復について言及している。

(1)-1 幸福祈願

相手の幸せや健康または病気の回復を祈りながら用件に入っていく典型的な書き出しのパターンが見られる。

- desiring to hear of your welfare and good health,
- desiring to know of your welfare and prosperity,
- desiring for to hear of your recovering and amending,
- I trust to God you are amended.

(1)-2 健康状態

相手に心配をかけないように、自分や自分の家族(関係者)の健康状態が好ましい状態であることを相手に伝え、安心させる。

- I am in welfare, I thank God,
- at the making of this letter our father and mother fared well, and send you their blessings,
- she was in good health at the making of this letter, thanked by God,
- and (they) are alive and merry,

また以前の病気はすでに回復し、現在は良好であることを伝える。

- thanked by God, the sickness is well ceased here,
- I have been likely diseased, but I thank God I am amended and walking, and Joyse have been sick also, but he is well mended, thanked by God,
- she had been very sick, but it had been her good, for she is fairer and slenderer than she was;
- Edward is sick and seemed not abiding,

それほど一般的ではないが、健康がすぐれなかったために予定通り事が進まなかった、と言い訳し

ている。

- I hane been at London a fortnight, whereof the first four days I was in such fear of the sickness, . . . , which troubled me gravely ;
- the cause, why I came not was this, I was fallen sick with an axis, and truly that caused me that I and my fellowship tarried,

自分の病気を知られてはまずいために病気のことを隠していた例もある。

- the cause why I sent no word of my sickness was that I would not my enemy should be rejoiced by the knowledge of my sickness,

(2) レターについて

今日のように郵便事業が発達しておらず、特に遠距離間の通信は容易ではなかった。そのため、必ずしも通信がうまくいくとは限らず、レターの当事者はまず、自分の出したレターが相手に無事到着したか、あるいは指示通りにレターを送付したかという事が重大な関心事であった。

(2)-1 レターの受領

相手のレターの受け取りを文字通りそのまま述べている。

- I have received a letter from you written at . . . , the which I have read and well understood,
- I have received a letter from you bearing date at . . . ,
- as yesterday came letters from London that
- thanking you right heartily of your gentle letter late sent to me;

また特定の持参人によって受け取ったことを明らかにしている。

- I have received your letter . . . that you sent by Yelverton's man
- I received a letter from you . . . , which was sent by John Holme
- I received your letter by Nicholas Colman

相手からのレターの内容に言及することによって間接的にレターの受け取りを明らかにしている。

- we think by the letter that you sent me by . . . that
- I conceive, by your letter which you sent me by . . . , that

- I understood by your letter that

また第三者からのレターの受け取りも明らかにしている。

- since you departed my cousin . . . sent me a letter complaining
- I let you know that my cousin . . . wrote to me that
- John Russe sent me word by . . . that
- all things directed to me from my godfather Maryon which was written at . . . , by which I understand that

そして第三者からのレターやそのコピーを同封する場合もある。

- as touching the matter which desired my cousin . . . should write for, . . . and I send you the copy enclosed in this letter.
- Sir, I send you herewith a letter from my B. William Dalton and letter enclosed,
- you shall receive enclosed in this letter a letter to William Bondman servant to take his horse,

第三者からのレターを受け取ったばかりという特別な場合がある。

- I have letters from Lord written in Napwyllys, but I read them not yet. When I see them I shall write to you of such things as is in them,

臨場感あふれる表現で、用件の緊急性を示している。

- The messenger was on horseback when I wrote this bill, and therefore it was done in haste.

(2)-2 レターの送付

前のレターに言及し、確かにレターを送ったことを明らかにしている。

- I have sent you a letter by Brawton for silk,
- I wrote you a letter, whereof John Carbalde had the bearing, promising me that
- As I sent you word, by a letter that . . . brought to London,

また本レターの転送を依頼する。

- praying that you will deliver this letter to my Lord, for I have written that you shall bring it him,

前のレターと今回のレターの間隔が近すぎて、相手がまだ前回のレターを受け取っていないと予想

しているものもある。

- I sent you a letter written at . . . , but I feel well you have not that letter as yet.

相手の指示通りに、第三者にレターを出したことを知らせている。

- I have sent to my cousin . . . , according to your desire
- I have oftentimes written to Pampyng, according to your desire, to inform you how . . .

(2)-3 レターの未受領

(最近) レターの受け取りがないことを相手に知らせる。

- I have received no letters from London of no such things yet, etc.
- other letters out of England have I received none since your mastership departed from . . .
- nevertheless you are not kind that you send me no knowledge thereof;

こちらからレターを何回も出しているのに返事がない、と相手の対応に不満のようすも見られる。

- I have written to you various letters, but I have of them none answer.
- I have received no letters out of England since you departed, but I have sent into England at every passage, etc.

同じように驚きを表明しているものもある。

- we marvel greatly that we have no writing from you.
- and (I) marvel for that you sent never writing to me since you departed; I heard never since that time any word out of Norfolk:
- I marvel much what is the cause that you send me no letter from . . . , for the which I think right strange,
- I have marvel that you send me no writing by Randofe . . . ,

また相手が他の用事で忙しく、レターを書く暇もないのであろう、と少々皮肉ったようすも見られる。

- I marvel that you sent me no word thereof: but you have now wife and child, and so much to care for that you forget me.

(2)-4 レターの書き方について

特殊なケースで、主に身分の下位の者が上位の者にレターを出したことについて許しを請うてい

る。

- I beseech you to pardon me of my writing, for I have pity to see the tribulation that my mistress had here,
- Forgive me, I wrote to make you laugh;
- wherefore this, by the information of your said Deputy, cause me to write upon to you this simple bill, praying you to pardon me of the writing, for it was done in haste,

また筆者のへりくだった気持ちが強く出たケースで、自分の語学力の不足について謝っている。

- but I had no leisure by my faith; hold me excused of my ignorant rude writing;
- I beseech your mastership to take no displeasure from my inadequate and incorrect English that I wrote, for at that time my mind was not quiet, for I was sick, but however I meant well.

(3) レターの持参人について

郵便事業がないために当時は、レターを相手に届ける役割の者がおり、彼の役割は重要であった。ただレターを届けるだけでなく、筆者に代わって状況を詳しく説明したり、物(商品)やお金の託送を依頼されることもあったので、レターの持参人は、十分信頼に足る人物が求められた。

(3)-1 口答説明

レターを届け、さらにその内容について直接説明しなければならない。

- The said Nicholas Crone, bearer hereof, shall tell you such news
- I believe the bearer of this shall tell more by mouth as he shall be informed of the rule in this country.
- I must beseech you of your good mastership and help in secret manner, as Sir Thomas Lynes the bearer of this shall inform you .
- The messenger that brought them I heard him say he departed from the King at the Tower of London

さらに、自分が書くよりも持参人が直接説明する旨を明らかにしている。

- Pynchamore shall tell you by mouth more than I have leisure to write now to you.
- as for such news as is here, please it you to come with the bringer hereof, and he will tell

you, for I dare not write, etc.

また持参人は信頼できるとわざわざことわっている。

- as for news the bearer hereof shall inform you; you must give credence to him.
- the cause why it was not endorsed was for the bearer thereof shall know you well enough.
- as the bringer hereof shall more plainly declare you, to whom you like to give credence.
- I would you should make much of the person of Filby, the bearer hereof, and make him good cheer if you may.

(3)-2 託送依頼

同じ持参人にレターの託送を依頼する。

- and, reverent master, remit me some letter by the bringer hereof of all these matters, . . . , and he is right much be trusted,
- it pleased your mastership to send me word again of my letter that I sent you by the bringer hereof.
- but send me by the bearer hereof more certain comfort than you have done by all other that I have sent before,

またレターだけではなく、物やお金の託送を依頼している。

- I will that you deliver to the said John or Hary, the bringer of this letter the pledge of Hays the which Phelype Seller left it at
- Sir, Harry Bryan, the bringer of this, labors me bitterly to go and see I am beholden to him for his labor, . . . , and I pray you deliver some money at this time and do well by him, for it is sure enough.
- the which money she prayed you heartily to pay to the said John or to his attorney and bringer of your said bill, now at this next March.

(3)-3 紹介

恐らく初めての持参人ということで、あらためて相手に紹介している。

- Sir, the bringer of this letter is John Saunders.
- Sir, the bringer of this letter his name is Wyl-liam Iland, servant with Hugh Clopton, etc.
- Sir, here is Rychard Prowde, the bringer of this letter, that sent you the version, has made labor to our father and me to write to you. . . ,

(4) 忠誠の誓いについて

主人に対して常に柔順でいるということを明らかにすることによって、主人の恩恵を受けようとする並々ならぬ努力の後が見られる。これらの表現は、家族間の通信には全く見られず、文字通り主従関係にある家来（部下）が使う限定されたもので、大げさに相手を奉り、自分を卑下している。

- thanking you evermore of your great gentleness and good masterhood showed unto me at all times, and specially now to my heart's ease, which on my part cannot be rewarded, but my simple service is even ready at your commandment;
- Sir, like as I promise you, I am your man, and my good will you shall have in word and deed, & c.
- and if there is any thing that I can do or may for you I am and shall be at your commandment.
- I have been an old servant and intend to bear you all my services my life during.

(5) その他

(5)-1 秘密保持

相手に直接説明することが容易でないために、あえて口外できないようなこともレターに書かなくてはならず、そのため筆者は、問題を外に漏らさないように、と念を押す必要もあった。

- All this bill must be secret.
- let these matters be kept secret by your best advice.
- Beseeching you to keep this letter private till I have spoken with you

(5)-2 天候／自然

日本語のレターにみられるような季節感を出すために言及しているのではなく、ただ時期を示しているにすぎない。

- that, not in the most happy season for me, it is so fortun'd that, whereas my Lord of Norfolk, yesterday being in good health, this night died about midnight,
- let him stable in the heed of winter, and let run the next summer.

しかし風邪をひきやすい危険な時期ということによって寒さを強調する工夫もみうけられる。

- you are so provided for that you take no cold by the way towards Norwich, for it is the most perilous March that ever was seen by any man's days that now lived;

また当時の交通手段（陸上：馬，海上：船）が天候の影響を受けやすいことを示している。

- at his coming here, which, as it is said, should be within eight days after St. Dunstan, if wind and weather serve him; flying tales.
- and their day, if wind and weather had served them, should have here soon upon Candlemas;
- but it was 5 days after you departed first, for here was non passage no sooner, the wind was so contrary and the sea so troubles, passage was half across the channel once or twice.

(5)-3 結びの言葉

本文の締めくくりとしておもしろい表現がみられる。まず（兄の死という）悲しみの虚脱状態をよく示している。

- I have much more to write, but my empty head will not let me remember it.

逆に、嬉しい知らせを直接伝えたいようすがわかる。

- I would write to you of many things, but I trust to tell you them merrily by mouth.

またレターを書くのに夜遅くまでかかったので、翌朝少し寝坊することを明らかにしている。

- No more to you at this time, but I will sleep an hour the longer tomorrow because I wrote so long and late tonight.

極端なケースであるが、レターを書き終えるのに非常に時間がかかったこと(1週間)を述べている。

- This letter was begun on Friday was sev'n-night, and ended this day next after Michaelmas day.

(from 22nd of September to 30th September, 1469)

いつの時代でも夫に愚痴ばかりこぼす妻はいたようである。

- By your groaning wife,

4. 一般的特徴

これまでの検討でそれぞれレターの筆者の基本

的な表現パターンが明らかになった。ここでは、この個人的な特徴をさらに同じような関係にあると思われるもの同士をまとめて、広く一般的な特徴を示してみたい。

レターの筆者と受取人の関係から通信レターを家族内と家族以外に分け、前者をさらに親子関係(親から子へ／子から親へ)と兄弟関係に分類し、比較してみる。

1) 家族内

(1) 親子

(1)-1 親から子へ

最初の部分では、2nd part の 2. 1) と 4th part の 10. 1) に共通項がある。1st, 2nd part は無視していいが、女性特有の優しさを示すものとして 3rd part の出現 (15. 17. 7. 4. 12) は、母親の場合必要となる。そこで書き出しは、

I greet you well, (and send you God's blessing and mine,) and let you know that

となる(母親の場合は () を追加する)。

終わりの部分では、3rd part の 13. 2) と 4th part の 6. 17) に共通項がみられる。1st part はなくてもよいが、2nd part は何らかの言及項目があり、無視できない。そこでレターの傾向から類推し、神の呼称を父親の場合は 3. 1), 母親の場合は 2. 1) とし、それに続く表現 28. 2) とした。これをまとめると、文末は、

Jesu (God) keep you. Written at ... in haste.
Per

(By your mother,)

のようになる(() は母親の場合)。

(1)-2 子から親へ

最初の部分の 1st part の D で見られるように、一般に相手への呼びかけを必要(父親の場合: 17 回, 母親の場合: 12 回)とし、しかも何らかの修飾語句をつけるようになっているため、B の共通項を見つけなければならない。幸いにも 8 (reverent and worshipful) と 12 (worshipful) の間に共通の表現として "worshipful" が見つけられた。2nd part と 4th part はそれぞれ共通項として 3. 2) と 13. 1. 5) が見受けられる。3rd part はなくて

もよいが、前述したように母親に対する優しさを示すために母親に出す場合は必要となる(() は母親に出す場合)。

Right worshipful father (mother), I recommend me to you, (and beseech you your blessing,) furthermore please it you to know that

終わりの部分では、1st part は活用しなくてもよいが、2nd part は何か言及項目を必要とする。ここでも神の呼称を父親の場合 [3. 1)] と母親の場合 [2. 1)] に分け、それに続く表現は両者に共通の 28. 2) を採用する。

Jesu (God) have you in his keeping. Written at

Your son,

(2) 兄弟

最初の部分の 1st part の D で、弟に対する場合の 2) と兄に対する場合の 13) のように、レターの名宛人との関係によって、表現は異なる。それに付随する修飾語句は残念ながら 11 (well-beloved) と 12 (worshipful) と二分されている。そこであえて共通項を見つけ出すために、残りの項目に注目してみると、幸いにも 11 と 12 を合わせた 15 (worshipful and well-beloved) があり、これを共通項として採用する。2nd part は 3. 4) = 「3. 2) + 副詞 (heartily)」であることから、3. 2) を共通項とする。3rd part は無視できるが、4th part の完全な共通項が見当たらない。そこで比較的多い項目 [13. 1. 5)] を採用する。まとめると、

Right worshipful and well-beloved brother (sir), I recommend me to you, and please it you to know that

となる(() は兄に対する場合)。

終わりの部分の 1st part と 3rd part はそれぞれ共通項として 2 と 13. 2) があげられる。2nd part は比較的多い 2. 1) と 28. 2) を採用する [28. 5) は、28. 5) = 「28. 2) + 修飾語 (blessed)」から 28. 2) に含める)。4th part は、活用されている場合と、全く無視されている場合とがあるが、最初の部分の 1st part の呼びかけ D で相互の関係(兄弟)がわかるため、ここでは不要とする。

□ □ □ □

今までの家族間の通信と違い、外からのレターは、特定の用件を伝えるためにわざわざ書かれたものと予想されるので、我々のいうところの現在のビジネスレターの原形ともいえるものが得られると思う。

Right worshipful sir, I recommend me to you,
please it you to know that . . .

No more to you at this time, but Jesus
have you in his keeping.
(keep you.)
(preserve you.)
Written at
Your servant. - - - -

レター数	from	to	Beginning 1st part				2nd part				3rd part	4th part	Ending				3rd part				4th part																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
			A	B	C	D	A	B-1	B-2	B-3			A	B	1st part	2nd part	A	B	A	B	C	D																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
30	Richard Cely the elder(父)	George Cely (子)					2.1)				- 4.1.2) 10.1)		20.17.7) (12.13.1.11)	3.1)	7.2)		13.2.8	5																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																

(1) 親子
(1)-1 親から子へ

(1)-2 子から親へ

レター数	from	to	Beginning 1st part				2nd part				3rd part	4th part	Ending 1st part				2nd part				3rd part				4th part			
			A		B		C	D	A	B-1			B-2	B-3	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	C	D		
7	George Cely (子)	Richard Cely the elder(父)	5	8		17	4/3.2) (1.2.3. 12.11)		11	8.5.2		13.1.5)	2(7.12. 13.1.11) 1.4)	28.2)/17	13.2	5.6		17										
9	Sir John Paston (子)	Mrs Margaret Paston (母)				12	1.1) 3.2)					13.1.5)	1.7.18.4 19.1	28.2)	13.2	2.6		17										
8	John Paston (子)	Mrs Margaret Paston (母)	5	12		12	4(1.2. 4.8.12) 3.2)		3	5.1)		13.1.5)	10.1.17 13.18.4	2.1) 2.8)	13.2	6	4	{17}.15										

(2) 兄弟

レター数	from	to	Beginning 1st part				2nd part				3rd part	4th part	Ending 1st part				2nd part				3rd part				4th part			
			A	B	C	D	A	B-1	B-2	B-3			A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	C	D		
47	Richard Cely the younger(兄)	George Cely (弟)	5	11		2	3.2) 3.4)	11.1.6	3) 1)	4.1.9 5.1.3		8.1) 13.1.5) 19.1.2)	2(7.12.13) (1.11)	7.2	13.2	5.6	3											
5	Robert Cely (兄)	George Cely (弟)	5	11	6	2	3.4)				8.1) 13.1.5)	2(7.12.1 3.1.11)	2	28.5)/17	13.2	2.6	3											
30	Sir John Paston (兄)	John Paston (弟)	5	12	15	2	3.2) 1.1)				10.2) 14.2.3) 19.11)	2(7.)	2.1)	28.2)	13.2													
17	John Paston (弟)	Sir John Paston (兄)	5	12		13	3.2)				17 13.1.5)	2(7.)	2.1)	12.2) 21.4)	13.2													

2) 家族以外

レター数	from	to	Beginning				2nd part				Ending				4th part			
			1st part				2nd part				3rd part				4th part			
			A	B	C	D	A	B-1	B-2	B-3	3rd part	4th part	A	B	1st part	2nd part	3rd part	4th part
32	William Cely	George Cely	5	12		13	4/3.3') (1.3.12)					13.1.5) 8.1)	2(7.12. 3.2) 14.1.11) 3.1)	7.2) 28.2)	13.2	5.6	15	
33	William Cely	Richard & George Cely	5	12	9.12 4.7 15.7	11	4/3.3') (1.3.12) (2)					13.1.5) 2(7.4.12. 3.2) 14.1.11) 3.1)	12.2) 7.2) 12.1)	13.2	5.6	15		
24	VAR.	John Paston	5	12	4 5	13 10 9.13.7	3.2) (1.3.12)					13.1.5) 19.2.2) 4.2.1)	2(7.12. 2.1) 13.1.11) 6.1) 1.1)	28.2) 12.2)	13.2	2.6 6	15 10	

14	VAR.	George Cely	5	12	8 9	13	3.2) 10 (13)/4 (1.3.12)		1)	5.1		4.2.1) 19.2.2)	2(7.12. 13.1.11) 4.2)	2	28.2) 12.2)	13.2	2.6	15	8
12	William Maryon	George Cely	5	6	9.15 7	(13)/4 3.2)						13.1.3)/ 21.2) 13.2.1)	2(7.12. 13.1.11)	6.1)	28.2)	13.2	2.8 5		
11	John Dalton	"	5.1/5.	11/12/1		2	4+3.2) (1.2.3 12.5) 3.2)+4)					21.2) 13.4.4) 5)	2(7.12. 13.1.11)	3.1)	7.2)	2	6 13.2 2.6	3	8
6	Thomas Kesten	"		6	9.15	(13)/5.13 3.2)/4 3.2)+4						13.1.5)		3.1) 3.5)	7.2)	13.2	5.8		
6	James Grashman	John Paston					4(1.3. 12.6)					13.1.5)				13.2(8)	6 8	15	
5	Richard Calle	"		5		10	3.2)					13.2.1) -2)		3.2)	12.2)	13.2	6	16	
5	John Russe	"	5	12	9.13.8	(13)/10 3.2)			8)			13.1.5) -4)	2(7.12. 13.1.11)	3.1)	21.1) 12.3)	13.2	6	16'	
4	Thomas Howys	"	5	12	9.7	(13)/10 3.2)						13.1.4)		2.1)	13.2	7.2) 6			
5	Tomas Playters	"					4(1.9. 16.12)					13.1.4)		3.1)	28.5)		6		

5. むすび

現在でこそ英語は、世界中で使用され、国際語としての地位を不動のものとしているが、その英語も、今から約 900 年前には、母国語としての地位すら脅かされていた。事実英国では、ノルマン人の征服 (1066 年) 以来約 200 年間は、フランス語が国を代表する言語として採用され、英語は単なる下層階級の言語に留まっていた。

しかし 14 世紀になると、英・仏の対立 (戦争) から、英国国民の間にフランスに対する激しい敵対意識が芽生え、フランス的なもの (あるいは外国のもの) を排除する運動が広まった。同時にまた英国では、自国に対する強烈なナショナリズム (愛国主義) が醸成され、英国国民は自分たちの言語への誇りや尊敬の念を持つようになった。そのような機運にちょうど呼応するかのようになり、ヘンリー 5 世が英語での公・私文書を多数発行していることが明らかになった。そのこともまた、英語の普及に貢献し、15 世紀には、英語は、文字通り母国語としての地位を確立した。

このようにして復活してきた英語が、実際に通信文としてどのように使用されていたかを探るのが本稿の目的であった。非常に限られた資料 (バストン・レター、セリー・レター) から当時のレターの特徴を導き出すのは少々強引かもしれない。しかし本稿で試みた分類・比較検討から、当時のレターのある程度の共通性が明らかになったように思う。レタースタイルについては、レターの筆者の個人的な書き方の傾向や、レターの発信者と受信者の関係が同じような状況下における共通の書き方が認められた。本文での言及項目についても、レターの筆者は、離れ離れになった者同士の健康 (管理) についての心配、郵便事業の存在しないことによるレターの受・発信についての関心、秘密保持のための持参人の役割の重要性などに多く触れ、当時の社会状況の特色が反映されている。また当事者の主従関係の影響を受けた「忠誠の誓い」が家族以外の通信のみに見られたことは、これ以後のビジネスレターのスタイルを検討

する上で、無視できない要因のひとつとなりそうである。また天候や自然についての言及は少なく、四季の移り変わりや寒暖の差による自然の変化などに触れることは、やはり日本語のレターのみに見られる特殊要因と考えられそうである。

最後に、本稿の分類結果を参考にし、当時の一般的なビジネスレターを再現してみると、恐らく次のような構成になるものと予想される。

Right worshipful sir, I recommend me to you, desiring to hear of your welfare and good health, and please it you to know that I have received your letter written at

(用件)

I believe the bearer of this shall tell more by mouth

If there is any thing that I can or may do for you, I am and shall be at your commandment. No more to you at this time, but Jesu have you in his keeping. Written at

Your servant, - - - -

上記のモデルレターは、現在のビジネスレターの原形といえる。これを出発点に、これ以後の 16, 17, 18, 19, 20 世紀、そして現在のビジネスレターのスタイルに至るプロセスを調べるのが次の課題となる。

(注)

- (1) *International Encyclopedia of Communications*, volume 2, Oxford University Press, 1989, p. 415.
- (2) Albert C. Baugh, *A History of the English Language*, second edition, Appleton-Century-Crofts, Inc., 1963, pp. 132-133.
- (3) *Ibid.*, p. 135.
- (4) 英国の年代記作者 Ramulf Higden が 1350 年頃に書いたと言われるラテン文の世界万国史 *Polychronicon* をジョン・オヴ・トレヴィサ (John of Trevisa) が英訳 (1385 年頃) したものの中に、「いなか育ちの人々も身分の高い人のふりをしたが、人に尊敬されるために、フランス語を話せるよう懸命に努力している」と書かれている。(バーナード・グルーム『英語発達史』(岡本庄三郎訳) 綜芸舎、昭和 53 年、41 ページ)
- (5) Albert C. Baugh, *op. cit.*, p. 135.

バーナード・グルームも同じように述べている。「すなわち英語は下層階級に根強く存続し、他方ノルマン語は上流階級で栄えたことである。宮廷はもっぱらフランス人から成り立っていた。裁判官は大抵フランス人で、弁論はフランス語で行なわれた。……学校での授業はフランス語で行われ、フランス語はラテン語とともに牧師に最もよく知られていた言語であり、彼らは会話には必ずフランス語やラテン語を用い

- た。」(バーナード・グルーム (岡本庄三郎訳), 前掲書, 43 ページ)
- (6) 中尾俊夫・寺島勉子『図説英語史入門』大修館書店, 1988 年, 83 ページ。
- (7) Albert C. Baugh, *op. cit.*, p. 153.
- (8) *Ibid.*, p. 154.
- (9) *Ibid.*, p. 157.
- (10) *Ibid.*, pp. 158-159. 当時の政治状況は以下の通り: 「1258 年 ヘンリー 3 世 (Henry III) は, 王のフランス人偏重に反発し, 経済的困難, 施政の改善を迫った諸侯, 聖職者とオックスフォード条款 (Provisions of Oxford) を結ばざるをえなかった。しかし事態は収まらず, 王はさらに 1264 年サイモン (Simon de Monfort) 率いる紳士階級と, いわゆる諸侯の乱 (Barons' War) を戦わねばならなかった。しかし王は破れ, サイモンが実質上の支配者となった。彼は紳士階級の主要人物を集め政治等の運営にともに当った。これが議会の始まりである。」(中尾俊夫・寺島勉子, 前掲書, 83-84 ページ。)
- (11) Albert C. Baugh, *op. cit.*, p. 159.
- (12) *Ibid.*, p. 160.
- (13) *Ibid.*, pp. 165-166.
- (14) 例えば, ある詩人は, 「フランス語を覚えるのにイギリス以外に住んだことはありませんから, 私が知っているのはイギリスの間違ったフランス語です。しかし本場でフランス語を覚えた読者は, 必要な場合には私のフランス語を直して下さい」(Albert C. Baugh, *op. cit.*, p. 167. (永嶋大典ほか訳『英語史』研究社出版, 1981 年, 170 ページ)) と述べ, またチョーサー (Chaucer) は, 有名な『カンタベリー物語』, 「総序の歌」(124-126 行) で, 尼僧院長を上品にからかって, 次のように言っている。「また彼女はフランス語を大変上手に優美に話したが, それはストラトフォード・マット・ボウの尼僧院流儀のフランス語であった。というのも, 彼女はバリのフランス語を知らなかったからである」(Albert C. Baugh, *op. cit.*, p. 168. (永嶋大典ほか訳, 170-171 ページ))
- (15) Albert C. Baugh, *op. cit.*, pp. 168-169.
- (16) *Ibid.*, pp. 171-173.
- (17) 年代記作者ジョン・オヴ・トレヴィサ (John of Trevisa) は, 英語が, フランス語を文法学校と紳士の家庭の両方から駆逐した旨を記し, 「今, 主の年の 1385 年, リチャード二世第九年に, イングランドのすべての文法学校で子供らはフランス語を捨て, 英語で解釈し学んでいる。一方では利点もあり, 他方では不利な点もある。利点として, 子供らは以前よりも少ない時間で彼らの文法を学び, 不利な点として今文法学校の子供らは彼らの左かかどが分からないと同様にフランス語を知らない。もし彼らが海を渡って旅行するとか, その他多くの場合には, これは彼らにとって損になる。そしてまた高貴の人々も彼らの子供に, フランス語をあまり教えなくなった」と書いている。(バーナード・グルーム (岡本庄三郎訳), 前掲書, 41-42 ページ。)
- (18) John H. Fisher, "Chancery and the Emergence of Standard Written English in the Fifteenth Century", *Speculum*, 52 (1977), p. 897.
- (19) Albert C. Baugh, *op. cit.*, pp. 177-178.
すなわち, 「今後法律家は母国語で弁論を行うべし」と定められたのである。(バーナード・グルーム (岡本庄三郎訳), 前掲書, 41 ページ)
- (20) John H. Fisher, *op. cit.*, pp. 879-880.
- (21) Malcolm Richardson, "Business Writing and the Spread of Literacy in Late Medieval England", *Studies in the History of Business Writing*, edited by George H. Douglas and Herbert W. Hildebrandt, The Association for Business Communication, 1985, p. 3.
- (22) 以下の説明は, Malcolm Richardson, *op. cit.*, pp. 3-5. による。
- (23) Albert C. Baugh, *op. cit.*, p. 182.
- (24) John H. Fisher, *op. cit.*, p. 878.
- (25) 以下の事例は, Albert C. Baugh, *op. cit.*, pp. 183-184. による。
- (26) Malcolm Richardson, "Henry V, the English Chancery, and Chancery English", *Speculum*, 55 (1980), p. 727.
- (27) *Ibid.*, p. 741.
- (28) Malcolm Richardson, "The First Century of English Business Writing, 1417-1525", *Studies in the History of Business Writing*, edited by George H. Douglas and Herbert W. Hildebrandt, The Association for Business Communication, 1985, p. 32.
- (29) Malcolm Richardson, "Henry V, the English Chancery, and Chancery English", p. 731.
- (30) *Ibid.*, p. 741.
- (31) Albert C. Baugh, *op. cit.*, pp. 183-184.
- (32) アルバート・C・ボー (永嶋大典ほか訳), 前掲書, 187 ページ。
- (33) アルバート・C・ボーは, 次のように述べている。
「彼の治世の終りと次の治世の初めが, 文書において一般に英語に採用され始めた時期に当たっている。切りのよい年数を求めるとすれば, 1425 年がほぼそれに近い期日を示しているとして差し支えない。」(アルバート・C・ボー (永嶋大典ほか訳), 前掲書, 188 ページ。)
- (34) Malcolm Richardson, "The First Century of English Business Writing, 1415-1525", p. 31.
- (35) John H. Fisher, *op. cit.*, p. 895.
- (36) Malcolm Richardson, *op. cit.*, p. 37.
- (37) 分類の結果は以下の表を参照。

〔付記〕

本稿は日本商業英語学会第 52 回全国大会 (1992 年 10 月 24 日 (土)・25 日 (日), 於関西学院大学) での報告 (25 日) をもとに作成された。

① 家族

(1) 夫婦 (妻から夫へ from Margaret Paston to John Paston))

注: [] = 順序が前後 (逆) のこと (+a) = レター文が続くこと

Date / Year	Beginning										Ending									
	1st part					2nd part					1st part					2nd part				
	A	B	(D)	C	D	A	B-1	B-2	B-3		A	B-1	B-2	B-3		A	B-1	B-2	B-3	
1 ? 1440	5	5			7	3.2)	11	1	6	10	3	2	(2.17)7	12.13.1.11	6.2)	28.2)	13.2		6	
2 9/28 1443	5	12			7	3.2)						4.2.3)/19.2.2)	4.1)	2.2)	(26.1))	28.2)	13.2.8.		7	
3 4/ 1448	5	12			7	3.2)						4.2.3)/14.2.1)	3.2)	6.2)	(26.1))	28.2)	13.2		7	
4 3/12 1449	5	12			7	3.2)						4.2.3)	1.3)	6.4)	(34.2))	28.2)	13.2		7	
5 4/ 1450	5	12			7	3.2)						14.2.1)	—	6.1)	28.2)	13.2		7		
6 5/5 " "	5	12			13	3.2)						18	/16. 2)	—	—	13.2 (8)	2.6	21.		
7 7/1 1451	5	12			7	3.2)						4.2.3)/14.2.1)	4.2)	6.3)	28.2)	13.2.8.		7		
8 4/21 1452	5	12			7	3.2)						14.2.1)	—	6.3)	28.2)	13.2		2.7		
9 11/5 " "	5	12			7	1.1)						14.1.2)	2	6.3)	(34.2))	28.2)	13. (+a)	7		
10 1/30 1452/3	5	12			7	3.2)						14.2.1)	1.2)	6.4)	28.2)	13.2		"	7	
11 7/6 1453	5	12			7	3.2)						14.2.1)	—	6.3)	28.2)	13.2		7		
12 3/ 1454	5	12			7	3.2)						14.2.1)	—	6.3)	28.2)	13.2		7		
13 11/25 1455/60	5	12			7	3.2)						13.2.1)	—	6.3)	28.2)	13.2		2.6		
14 2/ " "	5	12			7	3.2)						14.2.1)	—	6.2)	28.2)	13.2		7		
15 ? 1459前	5	12			7	3.2)						14.1.1)	—	6.1)	(34.2))	28.2)		—		
16 1/ " "	5	12			7	3.2)						4.2.1)/14.2.1)	—	6.3)	28.2)	13.2		2.7		
17 4/29 1459	5	12			7	3.2)						13.2.1)	—	2.1)	(34.2))	28.2)	13.2 (8)	"	2.7	
18 8/17 1460	5	12			7	3.2)						13.1.5)	—	—	—	—	—	2.7		
19 2/1 " "	5	12			7	3.2)						14.2.1)	—	—	—	—	—	2.7		
20 3/1 1460/1	—	—			—	—						13.1.5)	—	—	—	—	—	2.6	3	21.
21 3/ ?	5	12			7	3.2)						4.2.3)/14.2.1)	2	6.3)	(34.4))	28.2)	13.2		7	
22 6/未 or 7/初1461	5	12			7	3.2)						4.2.3)/14.2.3)	—	6.3)	28.2)	13.2.8.		7		
23 7/15 " "	—	—			—	—						13.1.4)	—	3.1)	28.2)	13.8.	"	2.6		
24 7/18 " "	5	12			7	3.2)						13.1.5)	—	6.3)	28.2)	13.8.	"	2.6		
25 11/ 1461/5	5	12			7	3.2)						13.1.4)	—	2.2)	28.2)	13.2		2.6		
26 12/ " "	5	12			7	3.2)						13.1.5)	—	6.3)	28.5)	13.		2.6		
27 1/18 1463/4	5	12			7	3.2)						13.1.4)	—	6.3)	28.2)	13.8.		6		
28 6/8 1464	5	12			7	3.2)						13.2.1)	—	6.3)	(34.3))	28.2)	13.8.	2.7		
29 5/ 1464/66	5	12			7	3.2)						4.2.3)/14.2.1)	—	6.2)	(34.3))	28.2)	13.2	7		
30 10/ " "	5	12			7	3.2)						13.2.2)	—	6.3)	28.2)	13.2		2.7		
31 5/20 1465	—	—			—	—						13.1.5)	—	6.3)	28.2)	13.2		2.7		
32 5/27 " "	5	12			7	3.2)						13.1.5)	4.2)	6.3)	28.2)	13.		2.7		
33 7/12 " "	5	12			7	3.2)						14.2.4)	2	2.10.17.5.12.13. (-a)	28.2)	13.	2.6			
34 10/27 " "	5	12			7	3.2)						13.1.5)	—	2.1)	(32)	28.2)	13.8.	2.7		
35 11/ " "	5	12			7	3.2)						13.1.5)	—	6.3)	(35.2))	28.2)	13.8.	2.7		
36 ? 1466前	—	—			—	—						13.2.1)	—	2.1)	28.2)	13.8 (8)	"	2.6		

(-a)

(-a)

(-a)

(2)-1. 親子 (母から子へ (from Margaret Paston to Sir John Paston, Knight))

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part			
	A	B (D)	C	D		A	B-1	B-2	B-3		A	B	3rd part	4th part
1 10/28 1466	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 34.2)	13.2. (+α)	2.6	11
2 11/ 1463/66	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 28.2/9(23.2)	13.2.	6	11
3 12/ 1466/70	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 7.2)	13. 8.	2.6	11
4 7/9 1468	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	6.3) 14.2) 35.2/22.2)	13.2.8.	2.6	11
5 4/3 1469	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 28.2/54.2)	13. 8.	2.6	11
6 9/1 "	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 7.2) 35.2/23.3)	13. 8.	2.6	11
7 9/12 "	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 7.2)	13. 8.	2.6	11
8 9/22-30 "	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 7.2) 33.2) (+α)	—	—	—
9 3/5 1474	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 7.2)	13.2.	2.6	11
10 8/10 1475	5	11	—	16	—	—	—	—	—	—	2.1) 34.5) 37.2)	13.2.	2.6	11
11 5/26 1478	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 34.2)	13.2.	2.6	11

(2)-2. 親子 (母から子へ (from Agnes Paston to John Paston))

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part			
	A	B (D)	C	D		A	B-1	B-2	B-3		A	B	3rd part	4th part
1 10/29 1444	—	—	—	16	2.1)	—	—	—	—	—	4.1) 28.6)	13.2	2.6	11
2 11/17 "	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 2.1)	13.2	2.6	11
3 11/16 1444/59	—	—	—	16	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 28.2)	13.2.8	2.6	11
4 7/6 1453	—	—	—	—	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 28.2)	13.2.8	2.6	11
5 3/6 1453/4	—	—	—	16	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 28.2)/18.2)	13.2	2.6	11
6 6/29 1454	—	—	—	16	2.1)	—	—	—	—	—	2.2) 2.2)/28.2)	13.2.8	2.6	11
7 3/8 1457/8	—	—	—	16	2.1)	—	—	—	—	—	2.1) 2.1)	13.2	2.6	11

(2)-3. 親子 (子から母へ (from Sir John Paston to Margaret Paston))

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part			
	A	B (D)	C	D		A	B-1	B-2	B-3		A	B	3rd part	4th part
1 ?	5	12	—	12	1.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2 9/15 1469	—	—	—	12	1.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3 4/18 1471	—	—	—	12	1.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4 1/8 1471/2	3	12	20	12	1.1)	—	—	—	—	—	2.1) 26.2)/27.2)	13.2 (+α)	2.6	17
5 2/20 1473	5	3	10	16	7	1.1)	—	—	—	—	3.1) 28.2)	13.2	6	17
6 3/21 1475	—	—	—	12	3.2)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7 3/28 1477	—	—	—	12	3.2)	—	—	—	—	—	7.12.13.1.11	13.2	2.6	17
8 5/13 1478	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.1) 28.2)	13.2	2.6	17
9 10/29 1479	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13. 8	—	—

(2)-4. 親子 (子から母へ (from John Paston to Margaret Paston))

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part		2nd part	
	A	B	(D)	C	D	A	B-1	B	B-2	B-3	3rd part		4th part	
1 7/5 1461/69	3	12		9.10.15.7	12 3.2)				(2) 5) 1)		2.17.13.18. 4.		13.1.5)	
2 10/11 1470	—				4.	1) (9) 3) 10) 12)			3) 5) 1)		10.1.17.13.18. 4.		13.1.5)	
3 4/ 1470/74	5	12			12 4.	1) 2) 8) 12)			3) 5) 1)		10.1.17.13.18. 4.		13.1.5)	
4 7/17 1471	5	12			12 3.2)				3) 5) 1)		10.1.17.13.18. 4.		13.1.5)	
5 5 or 6/ 1476	—				4.	1) 2) 4) 12)			8) 5) 1)		10.1.17.13.18.5.4.		13.1.5)	
6 3/8 1476/7	5	12			12 4.	1) 2) 4) 12)			3) 5) 1)		10.1.17.13.18.5.4.14		13.1.5)	
7 11/ 1479	5	12			12 4.	1) 2) 4) 8) 12)			3) 5) 1)		10.1.17.13.18.5.4.14		13.1.5)	
8 12/ "	5	12			12 4.	1) 2) 4) 8) 12)			3) 5) 1)		10.1.17.13.18.5.4.14		13.1.5)	

(3)-1. 兄弟 (兄から弟へ (from Sir John Paston to his brother John Paston))

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part		2nd part	
	A	B	(D)	C	D	A	B-1	B	B-2	B-3	3rd part		4th part	
1 4/30 1406					2	1.1)					~		13	
2 11/9 1468	5	11			2 1.1)						10. 2)		13	
3 3/17 "	5	15			2 1.1)						10. 2)		13	
4 4/ 1469	5	15			2 3.4)						19.2.2)		13	
5 ? ?	—				2	3.2)					17.		—	
6 9/18 1469	—				2	1.1)					15.		13	
7 ? ?	—				2	1.1)					10. 2)		13	
8 8/5 1470	—				2	1.1)					14.2.3)		13	
9 11/15 "	—				2	1.1)					10. 2)/19.1.1)		13	
10 9/13 or 15 1471	5	11			2	1.1)					10. 2)		13	
11 9/28 "	—				2	1.1)					14.1.1)		13	
12 2/17 1471/2					2	1.1)					10. 2)		13	
13 11/4 1472	15				2 3.2)						10. 2)		13	
14 11/ "					2 1.1)						10. 2)		13	
15 2/3 1473	11				2	1.1)					~23.		13	
16 4/15 "	15				2	1.1)					10. 2)		13	
17 4/16 "	(5 6)	12		1	2 3.2)						10. 2)		13	
18 5/18 "	5	12			2 3.2)						~23		13	
19 6/3 "	5	12			2 3.2)						10. 2)		13	
20 11/22 "	5 (6)	12		1	2 1.1)						10. 2)		13	
21 11/20 1474	5	15			2 3.2)						10. 2)		13	
22 12/11 "	—				2	3.2)					10. 2)		13	
23 1/17 "	—				2	3.2)					14.2.4)		13	
24 1/17 "	—				2	3.2)					10. 2)		13	
25 6/30 1476	—				2	3.2)					11. 2)		13	
26 2/14 "	—				2	3.2)					10. 2)		13	
27 3/9 1476/7	—				2	3.2)					10. 2)		13	
28 4/14 1477	5 (6)	12		1	2 3.2)						10. 2)		13	
29 6/23 "	—				2 3.2)						10. 2)		13	
30 8/23 or 25 1478	—				2 3.2)						19.1.1)		13.2	

(名前なし)
(+a)
(+a)
(名前なし)
(+a)

(名前なし)

(3)-2. 兄弟 (弟から兄へ (from John Paston to Sir John Paston))

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part		2nd part	
	A	B	(D)	C	D	A	B-1	B-2	B-3	B	3rd part		A	B
1 2/ 1466後					13						4 2)		13. (-a)	
2 4/7 1469					13						—		13.2	6
3 4/ "					13						—		6	
4 7/ "													—	
5 5/ "					13								13.	
6 9/ "	5	12			13 3.2)								13.	
7 10/5 "	5	12			13 3.2)								13.	
8 12 or 1/ "	5	12			13 3.2)								13.	
9 1/23 1469/70	5	12	13 9	15 7 2	13 3.2)					9)	2	7	2.1) ?	
10 6/22 1470	5	12	13 9	15 7 2	13 3.2)	(+a)					2	7	2.1) 12.2)	
11 6/25 "	5	12			13 3.2)						2	7	2.1) 21.5)	
12 ? "	5	12			13 3.2)						2	7	38.	
13 6/5 1472	5	12			13 3.2)						2	7	2.1) 21.4) (+a)	
14 9/21 "	5	12			13 3.2)						2	7	2.1) 26.1)	
15 7/25 1474	5	12			13 3.2)						2	7	2.1) 7.2)	
16 10/23 1475	—				4.	1) 2) 4) 12)					—		13.2	2
17 5/6 1476	—				4	1) 2) 4) 12)					—		2	

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

② 家族以外 (to John Paston)

from	Date Year	Beginning										Ending			
		1st part					2nd part					1st part		2nd part	
		A	B	(D)	C	D	A	B-1	B-2	B-3	B	3rd part		A	B
(1) 1 James Grashman	8/19 1450	5	15	13 9.	4.	10 3.2)						3.2)		13.2. (8)	8 9
2 "	10/28 1455	—				4	1) 3) 12) 6)							2. (8)	6 7
3 "	6/21 1461					4	1) 3) 12)							13.2. (8)	6 8
4 "	3/24 1461/2					4	1) 3) 12)							2. (8)	6 7
5 "	1/26 1463/4					4	1) 3) 12) 6)							13.2	8 7
6 "	4/初 1471					4	1) 3) 12) 6)	11) 1) 6) 9)						13.2	7
(2) 1 Richard Calle	12/29 1450/60?	5	12	9.10.11.	10 3.2)									3.2) 12.2)/35.2)	6 7
2 "	?	—				10 3.3)						—		13.2	6 7
3 "	6/5 1461	5	5											2.2) 12.2)	6 7
4 "	3/15 1461/2	—												3.2) 12.2)	6 7
5 "	7/10 1465	—												3.2) 12.1)/7.2)	6 7
(3) 1 John Russe	8/23 1461	5	12	13 9.13.8.	10 3.3)							1.1)		3.1) 24.3)/12.3)	6
2 "	?	5	12	13 9.13.8.	10 3.2)							2	7. 12.13.1.11	3.1) 20/21.1)	6 2
3 "	?	—								8)		—		13.1.5)	6 6
4 "	?	—										2	7. 12.13.1.11	3.1) 21.5)/1.2)	6 2
5 "	7/15 1462/63	5	12	13 9.13.8.	10 3.2)					8)				3.1) 21.2)/12.3)	6
(4) 1 Thomas Playters	4/18 1461	—										3.3)		2.8) 12.2)/28.5)	6
2 "	4/ "	—				4	1) 9) 16) 12)							3.1) 28.5)	6 6
3 "	5 or 6/ "	—				4	1) 9) 16) 12)					2	7.	3.2) 28.2)	6 6
4 "	7/ 1462	—										—		13.1.4)	6 6
5 "	7/20 後 "	—										—		13.1.4)	6

(+a)

(+a)

(5) from various persons to John Paston

	Date Year	Beginning										Ending			
		1st part					2nd part					1st part		2nd part	
		A	B	(D)	C	D	A	B-1	B-2	B-3	3rd part	4th part	1st part	A	B
1 Robert Repps	11/1 1440	—										27. 2)	7.	6.1)	39. (+a)
2 William Wayte	10/6 1451/56	—				13					13.1.1)	4.2.1)/13.2.2)	7.	2.6)	28.2)
3 J. Payn (6or7/ 1450)	? 1465	5	3	9	13	3 1	10	3.2)			11)1)	4)2)8)	(2.17)7.12.13.1.11	6.1)	12.2)
4 John Clopton	4/12 1454	5	16	13	9	13	7	10	3.2)		19.2.2)/23.	4.2.1)/26.	7.12.13.1.11	1.1)	28.2)
5 R. Dollay	6/29or12/28 "	5	10			10	3.2)				13.1.5)	16. 1)	7.	1.11	3.2)
6 John Osborn	8/ 1457/60	—									13.1.5)	16. 1)	7.	1.11	3.2)
7 John Brackley	? 1460	5	4			13	4.	1)	3)	12)					
8 Abbot of Langley	9/4 1463	5	12	13	17	1	9	1.1)			9. 2)	22. 2)/10.1)	(2.17)7.12.13.	6.1)	28.3)
9 William Nauton	? 1463	5	12			13	3.2)				19.1.4)	11. 3)		1.1)	28.2)
10 William Jenney	8/ 1462/2		12	13	9	13	7	10	3.2)		19.1.4)	11. 3)			
11 John Davy	? 1460	5	12			13	3.2)				19.2.1)/ 4.2.2)	2	7.	1.11	2.3)
12 Friar John Nowth	5/12 1462	5	5			13	3.4)				19.2.1)/ 4.2.2)	2	7.	2.1)	14.3)
13 R. C. V. C.	? 1462/65	5	12			10	3.2)				21		7.12.14.1.11	3.1)	28.2)
14 J. Daubeney	7/2 1463	3	5			10	3.2)				13.1.4)				
15 John Pampynge	2/末 1463/4	—									13.1.4)/23.1)				
16 Thowas Daverse	1/29 1463/69					9	13	15	7	10	19.2.4)				
17 B. D. M. S.	9or10/ 1466	—									23. 1)		7.12.13.1.11	1.1)	28.2)/32.1)
18 J. Strange	1/ 1466/69	5	12			13	4.	1)	3)	12)	13.1.5)			2.5)	12.2)
19 Hugh Penne	3or4/ 1467/69	5	12			13	3.2)				11. 1)			2.1)	24.2)
20 William Eboham	? 1469	4	3			10	15				2. 2)			8.1)/12.3)	
21 R. L.	10/22 1470	5	12			13	1.1)				13.1.5)		7.	2.1)	28.2)
22 Thomas Kela	2/ 1476/7	5	12			13	3.2)				10. 1)/23.1)			3.1)	28.3)
23 Edmund Bedyngfeld	8/17 1477					10	4.	1)2)3)	12)		4.1.3)/13.1.5)			4.1)	28.2)
24 T. Griggs	2/2 1487/8	5	4			8		1)	2)	10)3)12)5)	17.			2.2)	28.2)

① 家族

(1)-1. 親子 (父から子へ (from Richard Cely the elder to George Cely))

Date / Year	Beginning				Ending			
	1st part		2nd part		1st part		2nd part	
	A	B (D)	C	D	A	B	A	B
1 1/28					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
2 5/23					2.1)		2. 17.7. 1.11	3.1) 7.1)
3 6/28					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
4 5/1					2.1)		4.2)/2. 17.7. 3.1)	7.2)
5 5/18					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
6 6/17					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
7 7/10					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
8 7/26					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
9 8/17					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
10 8/25					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
11 10/10					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
12 11/6					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 28.2)
13 4/15					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
14 4/30					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
15 5/13					2.1)		2. 17.7.12.13. 3.1)	7.2)
16 5/21					2.1)		2. 17.7.12.13. 3.1)	7.2)
17 6/14					2.1)		2. 17.7. 1.11	3.1) 7.2)
18 11/6					2.1)		2. 17.7.12.13. 3.1)	7.2)
19 11/11					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
20 12/10					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
21 12/11					2.1)		2. 17.7. 1.11	3.1) 7.2)
22 5/3					2.1)		2. 17.7. 1.11	3.1) 7.2)
23 5/22					2.1)		2. 17.7.12. 3.1)	7.2)
24 6/2					2.1)		2. 17.7.12. 3.1)	7.2)
25 9/1					2.1)		2. 17.7.12.13. 3.1)	7.2)
26 9/25					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 7.2)
27 10/13					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 28.2)
28 10/29					2.1)		2. 17.7.12.13.1.11	3.1) 28.1)
29 6/4					2.1)		2. 17.7. 3.1)	7.2)
30 7/31					2.1)		7.12.13. 3.1)	7.2)

(名前なし)

(1)-2. 親子 (子から父へ (from George Cely to Richard Cely the elder))

Date / Year	Beginning				Ending			
	1st part		2nd part		1st part		2nd part	
	A	B (D)	C	D	A	B	A	B
1 5/8	5	12		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2
2 11/23	5	8		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2
3 3/12	5	8		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2
4 3/21	5	8		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2
5 11/6	5	8		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2
6 11/24	5	8		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2
7 8/5	5	8		17	4	1)2)3)12)11)3)2)	11) 8)5)2)	13.2

(+a)

(2)-1. 兄弟 (兄から弟へ (from Richard Cely the younger to George Cely))

Date / Year	Beginning										Ending									
	1st part					2nd part					3rd part					4th part				
	A	B	(D)	C	D	A	B-1	B-2	B-3		A	B				A	B	C	D	
1 10/28 1476	5. (6)	11			2- (3.4)						11. 2)					13. 2	5			(+a)
2 3/26 1478	5. 6	7			2 3.2)						19.1.2)/(8.1)					13. 2	5. 6	3		
3 6/18 "	5.	11	9.	4. 7	2 3.2)						8. 1)					13. 2	2. 6	3		
4 8/27 "	5.	11			2- 3.2)						8. 1)					13. 2	(+a)			
5 9/25 "	5.	11			2 3.4)						13.1.5)					13. 2	5			
6 12/15 "	5.	11			2- 3.4)						19.2.2)					13. 2	5			
7 4/9 1479	5.	7			2 3.2)						8. 1)					13. 2(+a)	5. 6	3		
8 5/26 "	5. 1	11			2 3.2)						13.1.5)					13. 2(+a)	5. 6	3		
9 11/8 "	5.	11			2 3.4)						4.2.1)/(8.1)					13. 2	5. 6	3		
10 11/11 "	5. 1	11		1.	2 3.4)						—					13. 2(+a)	5. 6	3		
11 12/9 "	5. 1	11			2 3.2)						4.2.3)/(8.1)					13. 2	5. 6	3		(+a)
12 12/12 "	4.5. 1	11			2 3.2)						19.2.2)/(8.1)					13. 2	5. 6	3		
13 4/7 1480	5. 1	11			2 3.4)						19.1.2)					13. 2	5. 6	3		
14 4/29 "	5. 1	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
15 5/15 "	5. 1	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
16 6/2 "	5. 1	11	9.	14. 7	2 3.2)						13.1.5)					13. 2	5. 6	3		
17 6/30 "	5. 1	11	9.	14. 7	2 3.2)						8. 1)					13. 2	2. 6	3		
18 7/5 "	5. 1	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2(+a)	5. 6	3		
19 9/2 "	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
20 11/15 "	5. 1	11			2 3.4)						14.1.3)					13. 2	5. 6	3		(+a)
21 11/22 "	5.	11			2 3.4)						19.1.3)					13. 2	5. 6	3		(+a)
22 12/12 "	5.	11			13 3.4)						13.1.5)					13. 2	5. 6	3		
23 1/26 1480/1	5.	11			2 3.2)						13.1.4)					13. 2	5. 6	3		
24 6/4 1481	5. 1	11			2 3.4)						13.1.5)					13. 2	5. 6	3		(+a)
25 6/24 "	5.	11			2 3.2)						19.2.3)					13. 2	5. 6	3		
26 7/21 "	5. 1	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5			
27 7/26 "	5. 1	11			2 3.4)						8. 1)					13. 2(+a)	5. 6	3		
28 10/24 "	5. 1	11			2 3.4)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
29 11/5 "	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
30 11/14 "	5.	11			2 3.2)						13.1.5)					13. 2	5. 6	3		
31 11/22 "	5.	11			2 3.4)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		(+a)
32 11/28 "	5.	11			2 3.2)						13.1.5)					13. 2	5. 6	3		
33 3/21 1481/2	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
34 3/29 1482	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
35 4/2 "	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
36 4/8 "	5. 1	11		1	2 3.4)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
37 5/13 "	5. 1	11			2 3.4)						8. 1)					13. 2	5			
38 5/22 "	5. 1	11		1	2 3.2)						8. 1)					13. 2	5			
39 5/25 "	5. 1	11			2 3.4)						8. 1)					13. 2	5			
40 6/1 "	5. 1	11		1	2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
41 6/24 "	5.	11			2 3.4)						19.2.2)					13. 2	5. 6	3		
42 9/26 "	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		
43 10/3 "	5.	11			2 3.4)						8. 1)					13. 2(+a)	5			(+a)
44 10/17 "	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5. 6	3		(+a)
45 ? 1487	5.	11			2 3.2)						8. 1)					13. 2	5			(+a)
46 8/ ?	5.	11			2 3.2)						17					5	5			
47 ?	?	?			2 3.2)						—					5. 6	—			

(2)-2. 兄弟 (兄から弟へ (from Robert Cely to George Cely))

Date / Year	Beginning						Ending					
	1st part			2nd part			1st part			2nd part		
	A	B (D)	C	D	A	B	A	B	C	A	B	D
1 4/13 1476		11			2 3.4)					9.6.10.2	5	
2 11/19 1477	5	11			2 3.4)		7.12.13.1.1.1	4.1)	7.2)	13.2	2.6	3
3 5/5 1478	5	9 13			2 1.1)		7.12.13.1.1.1	2.2)	28.5)	13.2	2.6	3
4 10/6 "		6 13			2 3.4)				8.2)/(28.2)/(17)	13.2.8	2.6	3
5 9/6 1480	5	8			2 3.4)				2.9)	28.5)/7	13.2. 12.15	2.6
												3

② 家族以外

(1) from William Cely to George Cely

Date / Year	Beginning						Ending					
	1st part			2nd part			1st part			2nd part		
	A	B (D)	C	D	A	B	A	B	C	A	B	D
1 12/7 1479	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)					2.9)	28.2)	13.2
2 3/23 1479/80		12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	28.5)	13.2	5	
3 6/1 1480		12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.13.1.1.1	3.2)	28.2)	13.2	5	
4 5/13 1481	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				9	28.2)	13.2	5.6
5 10/26 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12	1.1)	3.1)	7.2)	13.2	5.6
6 10/31 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.13.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
7 11/2 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.13.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
8 4/20 1482	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				3.2)	7.2)	13.2	5.6
9 4/23 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				3.1)	7.2)	13.2	5.6
10 4/29 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				3.2)	28.2)	13.2	~
11 5/2 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				2.7)	28.2)	13.2	5.6
12 5/5 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				3.1)	7.2)	13.2	5.6
13 5/7 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	28.2)	13.2	5.6	15
14 5/10 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	13/7.2)	13.2	5.6	15
15 5/20 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				3.2)	7.2)/(3.1)	13.2	5.6
16 5/26 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
17 7/4 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
18 8/3 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
19 8/13 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
20 8/29 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
21 9/30 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.1)	13.2	5.6	15
22 10/6 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
23 10/19 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
24 10/20 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.1)	7.2)	13.2	5.6	15
25 11/13 1483	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)				2.7)	28.5)	13.2	5.6
26 4/14 1484	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	12.2)	13.2	5.6	15
27 4/23 "	5	12		13 4	1) 3) 12) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	12.2)	13.2.8	5.6	15
28 1/ 1486/7	5	12 13 9. 4.7		10 4	1) 2) 3) 12) 11) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	12.2)	13.2	~	15
29 1/ "	5	12 13 9. 15.7		10 4	1) 2) 3) 12) 11) 3.3)		7.12.14.1.1.1	3.2)	12.2)	13.2	5.6	15
30 9/18 1487	5	12 14 9. 12. 11 4		10 4	1) 2) 3) 12) 11) 3.3)				3.2)	1.1)/(12.2)	13	5.6
31 3/12 1487/8	5	12 13 9. 4.7		10 4	1) 2) 3) 12) 11) 3.3)				3.2)	7.2)/17	2	5.6
32 2/29 "	~				15) 2) 3) 12) 11) 3.3)							15

(+a)

(2) from William Cely to Richard & George Cely

Date / Year	Beginning										Ending			
	1st part					2nd part					1st part		2nd part	
	A	B	(D)	C	D	A	B-1	B-2	B-3	B			A	B
1 7/31 1482	5	12			14 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
2 8/13 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)
3 8/16 "	5	12			14 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)
4 8/19 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)
5 8/20 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	28.2)
6 8/23 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
7 8/29 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
8 9/3 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
9 9/8 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
10 9/12 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
11 11/18 1483	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
12 12/5 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
13 1/5 1483/4	5	12	14 9, 15.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
14 1/29 "	5	12			13 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
15 2/10 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
16 2/24 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
17 2/29 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
18 3/3 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
19 3/17 "	5	12			11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
20 3/25 1484	5	12	14 9, 15.7		14 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
21 3/27 "	5	12	9, 15.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
22 4/10 "	5	12	14 9, 4.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
23 4/28 "	5	12	14 9, 4.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
24 5/9 "	5	12	14 9, 4.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
25 5/22 "	5	12	14 9, 4.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
26 6/3 "	5	12	14 9, 4.7		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
27 9/12 1487	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
28 10/29 "	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
29 11/19 "	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
30 12/16 "	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
31 "	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
32 1/22 1487/8	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)
33 2/15 "	5	12	14 9, 12.		11 4	1) 3(12) /3.3)					2	7.12.14.1.11	3.1)	7.2)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

(+a)

from	Date Year	Beginning						Ending														
		1st part			2nd part			4th part	1st part		2nd part		4th part									
		A	B	(D)	C	D	A		B	A	B	A	B	C	D							
3)	1 William Marvon	9/28	1476	5	6	13	9	15	4	3.2)				13.1.3)/(21.2)	2	7.12.13.1.11	6.1)	28.2)	13.2	2.8		
	2 "	11/5	"	5	6	13	9	15	4	3.2)				13.1.3)/(21.2)	—	—	—	—	13.2	2.8		
	3 "	7/22	1479	5	6	13	9	15	4	3.2)				13.1.3)/(21.2)	2	7.12.13.1.11	6.1)	28.2)	13.2	5		
	4 "	11/8 前	"	—	—	—	—	—	—	—				14.1.2)	—	—	—	—	—	—		
	5 "	11/8	"	5	6	13	9	15	4	3.2)				4.2.1)	—	—	—	—	13.2	5		
	6 "	11/19	1480	5	6	13	9	15	7	4	3.2)			13.2.1)	2	7.12.13.1.11	6.1)	28.2)	13.2	5		
	7 "	10/28	1481	5	6	13	9	15	7	4	3.2)			4.2.1)/(13.2.1)	2	7.12.13.1.11	6.1)	28.5)	13.2	5		
	8 "	4/2	1482	5	6	13	9	15	7	4	3.2)			13.1.3)/(21.2)	2	7.12.13.1.11	6.1)	28.2)	13.2	2.8		
	9 "	4/14	"	5	6	13	9	15	4	3.2)				13.1.3)/(21.2)	—	—	—	—	13.2	2.8		
	10 "	4/20	"	5	14	13	9	15	7	4	3.2)			13.1.3)/(21.2)	—	—	—	—	13.2	5.8		
	11 "	9/20	1484	5	12	13	9	15	7	4	3.2)			4.2.1)/(13.2.1)	2	7.12.13.1.11	—	—	13.2	5.6		
	12 "	11/8	1478	5	6	13	9	15	4	3.2)				13.1.2)	2	7.12.13.1.11	—	—	13.2	2.8		
4)	1 John Dalton	3/4	1477/8	5	11	—	—	—	—	—				3	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	13.2	2.6	3	
	2 "	7/24	1478	—	11	—	—	—	—	—				14.2.2)	—	—	—	—	13.2	2.6	3	
	3 "	2/12	1478/9	5	1	11	—	—	—	—				21. 2)	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	13.2	2.6	3	
	4 "	4/28	1479	—	—	—	—	—	—	—				21. 2)	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	13.2	6	3	
	5 "	5/8	"	—	—	—	—	—	—	—				—	—	—	—	—	13.2(8)	2		
	6 "	9/22	1481	5	12	13	—	—	—	—				13.1.4)	2	7.12.13.1.11	4.1)	30.2)	2	6	3	
	7 "	1/1	1481/2	5	12	—	—	—	—	—				12)(3)(12)(6)/(3.2)	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	2	8	8	
	8 "	1/19	"	12	—	—	—	—	—	—				17.	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	2	6	2	
	9 "	1/27	"	5	1	1	—	—	—	—				—	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	2	6	3	
	10 "	4/23	1482	1	1	—	—	—	—	—				—	—	—	—	—	2	6	3	
	11 "	8/12	"	5	1	1	—	—	—	—				13.1.5)	2	7.12.13.1.11	3.1)	7.2)	2	6	3	
														—	—	—	—	8.2)/(12.2)	2	8		(1)/8
5)	1 Thomas Kesten	?	1476	—	—	—	—	—	—	—				22.3				3.1)	7.2)/17	13.2	5	8
	2 "	11/30	1479	8	13	9	15	5	3.2)					4.2.3)/(21.1)				3.1)	7.2)	13.7(+a)	2.1	
	3 "	2/13	1481/2	6	13	9	15	5	4	2)(3)(12)(6)				13.1.5)				3.5)	7.2)	13	5.8	
	4 "	2/21	"	6	—	—	—	—	—	2)(3)(12)(6)				13.1.5)				3.1)	7.2)	8	5	(15)
	5 "	3/14	"	12	—	—	—	—	—	—				5				8.3)/7.2)	13.2.12.4	5.8	16	
	6 "	5/17	1484	5	13	—	—	—	—	1)(2)(3)(12)~				~				3.3)	7.2)	13.2.12.4	5.8	
6)	1 John Spencer	12/2	1476	5	12	13	9	5	4	3.2)				4.2.1)/(19.2.4)	2	7.	1.11	6.1)	28.2)	13.2	8	
	2 The Vicar Watford	?	1478	—	8	—	—	—	—	—				14.1.1)	4.2)			2.5)	28.2)	2.6	4	
	3 Thomas Granger	10/20	1479	5	9	—	—	—	—	—				4.2.1)/(11.2)				8.4)/(25.2)/	13.2	2.7	8	
	4 John Sambach	11/6	"	5	10	—	—	—	—	—				14.2.5)/(13.1.3)	4.2)			3.1)	28.2)	13.2	2.7	
	5 Ralph Lemington	11/8	"	9	—	—	—	—	—	—				4.2.3)	4.3)			2.1)	7.2)	13.2	7	
	6 John Goldson	11/30	"	5	12	—	—	—	—	—				4.2.1)/3				2.5)	28.2)	13.2	2.6	15
	7 Robert Good	6/24	1480	5	8	—	—	—	—	—				4.2.1)	2	7.12.13.1.11	6.2)	28.2)	13.2	5.6	15	
	8 Harold Stawenorn	7/19	"	—	—	—	—	—	—	—				14.1.1)				8.1)/(12.1)	2	2.8	8	
	9 Edmond Bedyngfeld	9/24	"	—	—	—	—	—	—	—				19.2.2)				4.1)	7.2)	2	6	
	10 Roland Thornburgh	8/4	1481	—	—	—	—	—	—	—				19.1.3)				7.12.13.1.11	2.2)	28.2)	2(+a)	2
	11 Joyce Parmenter	1/30	1481/2	5	12	—	—	—	—	—				10. 2)	2	2.3. 7.12.13. (+a)	3.3)	12.2)	2	2.6	15	
	12 William Adam	5/14	1482	5	12	—	—	—	—	—				11. 2)	2	7.12.13. (+a)	3.3)	12.2)	13.2	7		
	13 John Pasmen	9/20	1484	5	12	—	—	—	—	—				(1) 5)(1)	2	7.12.13.1.11	3.1)	12.2)	13	8		
	14 John Eldurbek	4/10	?	—	12	—	—	—	—	—				(1) 5)(6)				(+a) 2.2)	12.2)	7		8

(名無し)

(+a)

(+a)

(+a)